「乳幼児期を大切に ～心と体の基礎を育てるとき～」

指導用
スライド教材
Ⅵ

豊かな心と社会性の成長・発達のために

～子供の自立・自律を目指して～

〔スライド教材 CD と指導の手引〕

東京都教育委員会

乳幼児期からの
子供の教育支援プロジェクト

はじめに

家庭は、子供にとって安心できる居場所であり、基本的な信頼感や思いやり、規範意識等、人との関係を作るための基礎が育まれる大切な場所です。同時に、家庭でのいろいろな生活の経験を通して、やがて社会へ巣立っていくために必要な様々な生活スキル等を身に付ける場所でもあります。また、家庭から広がる地域での生活、子供同士の集団等の中で、責任感、創造力、自主性、集団の規範、粘り強さ等、社会生活に必要な基本的な力を身に付けます。それゆえ、「家庭教育は、すべての教育の出発点」と言われています。

近年の児童虐待の増加や校内暴力、不登校といった、深刻化する子供の問題行動の背景として、都市化、核家族化、少子化、地域における地縁的なつながりの稀薄化等により、子供の教育の仕方が分からない等の育児の悩みを抱える親が増えていることが考えられます。こうした状況を踏まえて、文部科学省は、平成 13 年、家庭教育支援の在り方について検討を行うため「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会」を設置し、平成 14 年に「『社会の宝』として子どもを育てよう！」という報告をまとめました。報告の中では、家庭教育について次のように書かれています。

「家庭教育は、親や、これに準ずる人が子どもに対して行う教育のことで、すべての教育の出発点であり、家庭は常に子どもの心の拠り所となるものです。乳幼児期からの親子の愛情による絆で結ばれた家族とのふれ合いを通じて、子どもが基本的な生活習慣・生活能力、人に対する信頼感、豊かな情操、他人に対する思いやりや善悪の判断などの基本的倫理観、自立心や自制心、社会的なマナーなどを身に付ける上で重要な役割を担うものです。さらに、人生を自ら切り拓いていく上で欠くことのできない職業観、人生観、創造力、企画力といったものも家庭教育の基礎の上に培われるものです。」

その後、平成 18 年教育基本法の改正により、家庭教育の条項が新設され「子の教育について第一義的責任を有する」のは「父母その他の保護者」であると明記されました。

この教材の作成委員会では、家庭教育の最終的な目標を、子供がやがて成長した時、社会生活を営むことができる力（ここでは「生活の力」と呼ぶことにします）を身に付けることと考え、生活に必要な様々なことを、“自分一人でできる”ようになる「自立」と“自らをコントロールできる”ようになる「自律」という、二つの言葉で表しました。

約 4 割の保護者が子育てについて悩みや不安を抱えており、その悩みや不安が大きいものについて 3 つまで挙げたところ、「しつけやマナーのこと」が最も多かったという調査の結果があります（※）。また、近年の家庭教育は、社会的な支えを失い、個々の家庭の中で親が個別責任において育てるものになっていると指摘する専門家もいます。

このような家庭教育をめぐる状況を踏まえ、子供の自立・自律を目指して、子供たちの豊かな心と社会性を育むために、地域で支援や指導に携わる方に活用していただくよう、このスライド教材を作成しました。教材と「指導の手引」を、保護者と共に考え、学び合い、未来を創る子供を共に育てるために御活用いただければ幸いです。

平成 25 年 3 月
東京都教育委員会

※「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」（平成 20 年度　文部科学省委託調査）

教材の活用にあたって

この教材は、子供の自立・自律を目指して、乳幼児期から「豊かな心と社会性」を育むことをテーマに、心の発達の理論を踏まえた子供への関わり方、家庭で育みたい社会性の基礎や生活の力、集団の中で育まれる社会性、豊かな心の育ちと絵本の読み聞かせ等について、保護者に伝えるためのイラストや写真、図等のスライド集です。保護者と共に学び考える多様な機会に、話合いの素材として、また、保護者の理解を助け、深める視覚教材として御活用ください。

●教材の特徴●

1．巻末の CD-ROM に 31 枚のスライドが、パワーポイント形式と PDF 形式の２つの形式で保存されています。いずれの形式のデータも、プロジェクターを接続することで大きな画面やスクリーンに投影することができます。また、必要なスライドを印刷することもできます。

【1 枚のスライドを選び使用する】
・PDF 版では、必要なスライドだけを選んで使用できます。連続して投影はできません。

【スライドを連続して投影する】
・パワーポイント版は、プレゼンテーション（発表・説明）用のソフトウェアで作成したスライドです。話の流れに沿ってスライドを順番に投影したい時に使用できます。「スライドショー」機能を使用すると、話の流れに沿って、必要なスライドを紙芝居のように連続して投影できます。スライドの順序の変更（入れ替え）も可能です。

2．この「指導の手引」には、スライドごとに、趣旨、解説、投げかけの例、関連事項や関連するスライド等を掲載しています。【投げかけの例】では、保護者に話し合いを促したり、考えるきっかけを提供する投げかけ方を例示しました。使用する際の参考にしてください。

3．この教材は、東京都教育委員会発行の保護者向け資料「乳幼児期を大切に」（写真）を詳しく説明した内容です。この資料を保護者に配布していただくと、話の内容を家庭でも振り返ることができます。この資料は東京都教育委員会「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」ウェブサイトからもご覧いただけます。

保護者向け資料「乳幼児期を大切に」
※主に０歳児の保護者に配付しています

〔乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト　ウェブサイト〕
http://www.nyuyoji-kyoiku-tokyo.jp/

4．東京都教育委員会では、このテーマの他に以下のテーマで指導用スライド教材を作成しています。いずれの内容も、本教材の内容と関連があるので、併せて御活用ください。すべての教材のスライドと「指導の手引」全ページを、東京都教育委員会「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」ウェブサイトで提供しています。

◆乳幼児期を大切に　～心と体の基礎を育てるとき～　指導用スライド教材◆
Ⅰ　脳と心の発達メカニズム　～五感の刺激の大切さ～
Ⅱ　生活リズムの確立のために
Ⅲ　運動能力の発達と『遊び』の大切さ　～運動遊びを通して育つもの～
Ⅳ　ふれあって、親子の絆を
Ⅴ　乳幼児期からの「食」を育む　～食文化と、体の中の食べ物の通り道～
Ⅵ　豊かな心と社会性の成長・発達のために　～子供の自立・自律を目指して～（本教材）

●スライドの動作環境について●

・「PDF」のスライドを使用するには、パソコンに「Acrobat Reader」というソフトがインストールされている必要があります。※インターネット上から無料でダウンロードできます。
・「パワーポイント」で使用するには、パソコンに「パワーポイント」のソフト（Mac 版又は Windows 版）がインストールされている必要があります。「パワーポイント」は有料で販売されていますが、編集はせずに表示するのみであれば、「ビューア」をダウンロードすることにより表示が可能になります。「ビューア」はインターネット上のマイクロソフト「ダウンロードセンター」ホームページから無料でダウンロードできます。

●その他の注意●

・このスライドの著作権は東京都教育委員会にあります。スライドのイラストやグラフ等を許可なく加工することはできません。
・「私的使用のための複製」等、著作権法で著作権者の権利の制限を受けている場合を除き、この著作物の無断複製・無断転載はできません。
・東京都内の幼稚園、保育所等が作成する「園便り」や保護者会資料等、配布の対象が限られている印刷物への掲載は、出典を明記し、スライドを加工しない限り、使用を許可します。使用の際は、東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課にご連絡ください。また、作成物を一部お送りください。

目 次

はじめに…… i
教材の活用にあたって…… ii

第１章　心の発達の理論と、幼児期の子供
～対人関係の発達を理解して関わるために～

1．どんな人に育ってほしいですか？…… 2
2．子供にとっての対人関係　～こんな場面、あんな場面～…… 4
3．人との関わりの基礎　～他人への基本的な信頼の土台は家庭で～…… 5
4．どうしてすぐに「ヤダ！」って言うの？…… 7
5．うちの子、嘘つき？…… 8
6．励まして、頑張って、達成させる。できたらぎゅーっと抱きしめてほめる。…… 9
《コラム》家庭教育をめぐる現状と課題及び家庭教育支援 …… 10

第２章　家庭で育む、社会性の基礎・生活の力

7．周りの力を借りて、家庭で生活の力の基礎を作りましょう…… 12
8．こんなこと、できるかな？生活の力を育てよう…… 13
9．就学前に身に付けたい８つの生活習慣…… 14
10．生活や遊びの中で、コミュニケーションの言葉を学びます …… 15
11．我が家のお手伝いを決めよう　生活の体験は、自立への準備、文化の伝承 …… 16
12．文化を伝承する　～季節とともに～ …… 17
13．季節とともに　～春～ …… 18
14．季節とともに　～夏～ …… 18
15．季節とともに　～秋～ …… 19
16．季節とともに　～冬～ …… 19
17．生活のルールは我が家から …… 20
18．よい行動を教えることは、子供への大切な贈り物 …… 21

第３章　集団の中で育まれる社会性　～幼児教育・保育の意義～

19．遊びの中で経験する社会性 …… 24
20．友達と一緒に遊ぼう！　～幼児期に育てたい社会性～ …… 25
21．群れ（集団）の中で学ぶもの、身に付く力 …… 26
22．保護者の皆さんも、いろいろな関わりを …… 27

第４章　豊かな心を育てるために
～心が育つ脳のメカニズムと、絵本の読み聞かせ～

23．絵本の読み聞かせは「心」に届いている？ …… 30
24．脳科学の先生が考える「心」って？ …… 31
25．読み聞かせが「心」を育てている …… 32
26．ドキドキ・ワクワクを探そう　～自然に触れて、五感の刺激をたくさん～ …… 33
27．赤ちゃんにも届いているよ、わかっているよ …… 34
28．読み手の脳も活性化しています …… 35
29．読み聞かせは親子のコミュニケーションにも◎！ …… 36
30．読み聞かせは子供と一緒に楽しむ気持ちで …… 37
31．読み聞かせのヒント　～こんなこと、していませんか？～ …… 38
《しずかなひととき　～乳幼児に絵本の読み聞かせを～》…… 39

参考資料・参考文献…… 42

第１章
心の発達の理論と、幼児期の子供
～対人関係の発達を理解して関わるために～

「豊かな心」や「社会性」は子供の人間関係の広がりに伴って身に付いていくものですが、少子化や核家族化、生活のあり様の変化や地域のつながりの希薄化等により、子供が家庭や地域の中での様々な関わりを通して成長発達し、ごく自然に社会性を身に付けることが難しくなっています。

そのような現状の中で、豊かな心と社会性を育てるために今は何をすればよいのか、具体的な子供への教え方が分からず、地域で子育ての方法を教えてくれる人とのつながりもなく、悩みや不安を抱く保護者もいます。

第一章は、親が、子供の対人関係や社会性の成長発達を科学的な側面から説明し、子供の発達段階に応じた適切な接し方・関わり方をアドバイスするためのスライドです。

子供は、自立するための様々な力を日々の生活を通して身に付け、育っていく存在であることを保護者に伝え、保護者と共に、子供の成長・発達を待ち、見守り、無理を強いることなく、目をかけていきましょう。

1　どんな人に育ってほしいですか？

スライド１

このスライドで伝えたいこと

≪導入での語りかけに≫

●子供の心や社会性を育てる話をする時に、育てたい心、身に付けてほしい社会性の内容を具体的に挙げてもらうことで、まずは保護者が子育てを長期的にとらえて目標を意識し、今、やっている子育てや子供との関わりには意味があることに気付いてもらい、子供の社会性の発達を踏まえた関わり方や心を育てる上で大切なことを学ぶための導入にします。

○ 解説

●毎日の子育てが何を目指しているのか、少し立ち止まって考えてみる機会を保護者に提供しましょう。親が我が子について思い描く「こんな心を持った人に育ってほしい」「こんな社会性を身に付けた人になってほしい」という具体的な将来像は、子育て・家庭教育の長期的な目標になります。

○ スライドの説明

●このスライドは、子育ての意識に関する３つの調査（※次頁）で「どんな人を目標として育って欲しいか」「子供が 15 歳になった時どのような子になって欲しいか」「子供の将来に対する期待」を聞いた設問で、多かった回答を順位に関係なく並べたものです。

●調査の回答から、多くの親が子供に大切にして欲しいと思っていることや身に付けて欲しいと思っていることが見えてきます。

●家庭によって、また親によって多少のニュアンスの違いはあるかもしれませんが、昔も今も、親の思いや願いは変わりません。多くの親は、思いやりの気持ちや人間関係、自立や社会性が大切だと思っていて、豊かな心と人間関係を培うことができるような人になり、いずれ社会に出てしっかりと生きていける人に育てたいと思っているのです。

○ 投げかけの例

（1）投げかける　：「15 年後（あるいは大きくなった時等）、どんな人になっていて欲しいでしょうか？」
（2）考える　　：それぞれが考えた後、グループで話し合いの時間をとります。
（3）まとめの助言：「それは、今、毎日行っている子育ての「長期的な目標」と言えます。今は、毎日の子育て中にはうまくいかないことがあっても、長い目で見るようにしましょう。○○年後のために、今、この乳幼児期に大切なことをしているのだと考えてみましょう。」

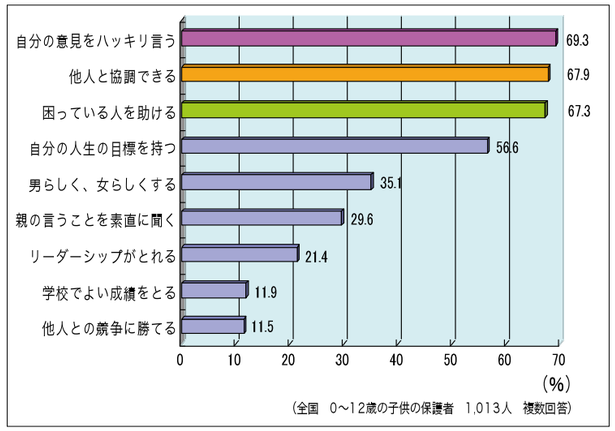
メ モ

【参考】

1．東京都教育庁「東京の教育に関する都民意識調査」（平成 15 年）より
　どのような人を目標として成長して欲しいか」という質問に対する、親を含む大人（2,028 人）の回答の上位は、『思いやりのある豊かな心をもった人』79.1%、『自ら進んで学び考えて行動する人』57.0%、『社会の基本的なルールやマナーが守れる人』50.4%となっています。

2．国立女性教育会館「平成 16 年度・17 年度　家庭教育に関する国際比較調査」

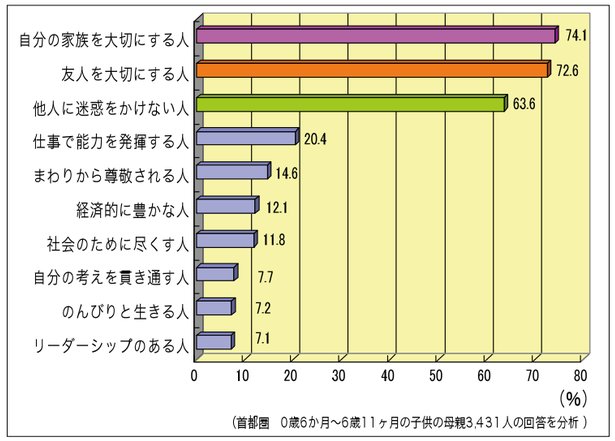
グラフ１「子供が 15 歳くらいになったとき、どのような子供になって欲しいと期待するのか」の質問に、「強く期待する」と回答した保護者の割合



「子どもへの期待」という節の中で「子どもが 15 歳ぐらいになった時、どのような子どもになって欲しいと期待するか」を９項目を挙げてたずねた質問に対し、日本の親が「強く期待すること」という回答が多かった項目の上位は、『自分の意見をハッキリ言う』69.3%、『他人と協調できる』67.9%、『困っている人を助ける』67.3%で、約７割の親が望んでいることでした。

3．ベネッセ教育研究開発センター次世代育成研究所
「第４回幼児の生活アンケート調査」（平成 22（2010）年）

グラフ２「子供の将来に対する期待」　（10項目の中から３つまで選択）



首都圏の０歳６ヶ月から６歳就学前の乳幼児の保護者 3,522 人へのアンケート調査では、「子供の将来に対する期待」について、10 項目から３つ選択する回答の上位１～３位は、『自分の家族を大切にする人』74.1%、『友人を大切にする人』72.6%、『他人に迷惑をかけない人』63.3%でした。家族、友人、他人等の対人関係に関する項目が上位を占める結果は、平成 17（2005）年第３回調査でも同様です。

2 子供にとっての対人関係　～こんな場面、あんな場面～

スライド２

このスライドで伝えたいこと

≪投げかけて考えるために≫

●子供が日常生活で経験する他人との関わりの具体的な場面を示し、子供の対人関係の発達と保護者をはじめ大人の関わり方を話し合う等、考えます。

○ 解説

●社会性の育ちには、子供の社会の広がりや言葉の発達が関係しています。
　他人とのコミュニケーションには、言葉は欠かせませんが、言葉を話せるようになっても、最初から協調したり、相手を尊重した接し方ができるわけではありません。単語を話し、少しずつ会話ができるようになり、親以外の他人ともコミュニケーションをとることができるようになるとともに、子供の社会が広がっていきます。子供同士や親以外の大人との関わりの中で、言葉が発達し、社会性が身に付いていきます。

●子供は大人の行動や態度をよく見ていて、まねをして成長します。大人は、いろいろな場面で、他人と接する時どのような態度をとればよいのか、どのような言葉を使えばよいのか、子供の手本になりましょう。まだ適切な行動や態度をとることができなくても、子供を受け止めて、どうするべきか教えてあげましょう。そしてよい行動や適切な態度をとることができたらしっかり褒めてあげましょう。

●子供は遊びが大好きですが、小さな時から友達と一緒に遊ぶわけではありません。例えば、小さな子供同士がおもちゃを取り合って親が対応に困るような場面はよくありますが、これは子供にとっては自分の気持ちを言葉で表し主張する大切な機会であり、このプロセスを経て、やがて貸し借りができるようになります。

●子供の言葉の発達と対人関係の広がりについての詳しいことは、教材Ⅳ「ふれあって、親子の絆を」の「指導の手引」を参考にしてください。

○ スライドの説明

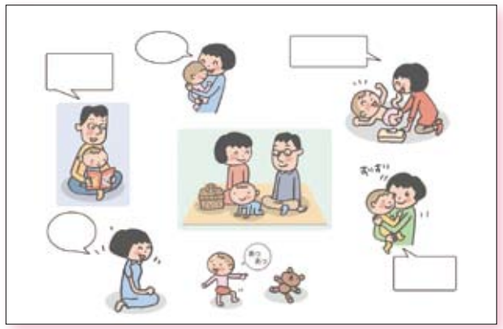
●スライドは、子供同士や、知っている大人・知らない大人等との関わりを経験するいろいろな場面です。
・砂山を一緒に作り、仲よく遊んでいる子供たちです。子供同士が協力し合って砂を運んだり、固めたり、トンネルを掘ったりしています。
・園に登園した時に、保育者と子供・親がお互いに「おはようございます」と挨拶をしているところです。保育園や幼稚園での生活では、親・家族以外では保育者が身近な大人です。このイラストでは、大人（保育者）もきちんと挨拶をして、手本になっています。
・図書館の幼児コーナーで絵本の読み聞かせに親子で参加しています。絵本を読んでいるのは、地域のボランティアの方です。一人の子供は母親の膝の上、もう一人はようやく歩けたくらいの年齢のようです。絵本に興味を持ったのか、母親から離れて読み聞かせている大人の方に歩いていきます。物語の意味や言葉の意味が分からない子供でも、場に慣れると安定して他人と一緒に楽しむことができ、子供同士が気になったり関わりをもつ等、大切な社会性の芽生えがあります。
・自己主張の言葉を覚えたばかりの頃、他の子供にぬいぐるみを貸すことができなかった子供と借りたくて泣いていた子供同士が、３～４歳になって「貸してあげる」「ありがとう」という会話を交わすことができています。

○ 投げかけの例

●他にも、子供はどんな場面で、友達や他人との接し方や付き合い方を学んでいるでしょう？大人はどんな場面で他人との接し方を子供に教えることができるでしょう？

3 人との関わりの基礎　～他人への基本的な信頼の土台は家庭で～

スライド３



このスライドで伝えたいこと

●人と関わるための基礎になる基本的な信頼感について発達心理の観点から説明します。
●最初に世話をしてくれる特定の人（多くの場合は親）との間に作られる心理的な絆（愛着）が、子供にとっての安定した拠り所になり、その後の対人関係の広がりの基盤になることを伝えます。

○ 解説

●他人への基本的な信頼感は、乳幼児期の「愛着」が土台になっています。
　生後７、８か月頃、赤ちゃんは、身近で世話をしてくれる特定の人（多くの場合は親）との「特別なコミュニケーション（意思疎通）」ができはじめます。これを発達心理学では、「愛着」が形成される、と言います。愛着が形成されることは、心の成長・発達段階の一つのステップです。

●この時期はまだ言葉でのコミュニケーションができません。表情のやり取りやスキンシップが赤ちゃんとのコミュニケーションです。他人（主に親）との心のつながり（愛着）をしっかりと作るためには、０歳～１歳の頃に、「人と関わるのが楽しい！」という経験をたくさん積むことが大切です。声をかけたり微笑みかけたりして、赤ちゃんとたっぷりコミュニケーションをとることが大切です。

●１歳後半から２歳になる頃、親等の信頼関係のある特定の人や馴染みのある人と見知らぬ人の判別ができるようになります。「特別なコミュニケーション」が通用しない相手に対しては恐怖や不安が引き起こされ、いわゆる「人見知り」の様子が見られるようになります。これは、「特別なコミュニケーション」をとることができる特定の人（親等）と愛着が形成されている証拠と言えます。

●愛着の対象（多くの場合は親）は、子供が外の世界と触れ合うための拠り所、言い換えれば安全･安心な「基地」の役割を果たします。やがて言葉の発達とともに家族以外の人とも関わるようになると、心の中にこの拠り所を持ち、それを基盤として外の世界に出て対人関係を築き、自分なりのネットワークを作っていきます。

●愛着の形成、言葉の発達やコミュニケーションについては、次頁（P6）も参考にしてください。

○ スライドの説明と投げかけの例

　イラストは、赤ちゃんと親がコミュニケーションをとっているいろいろな場面です。言葉でのコミュニケーションができるようになる前の時期ですが、親子が笑顔で目を合わせたりスキンシップしています。
　吹き出しが空欄になっています。みなさんはどんな言葉をかけていますか？

○ 関連スライド

教材Ⅳ「ふれあって、親子のきずなを」より
スライド３「心のつながり（親子の絆）の成長・発達の道すじ」
スライド４「赤ちゃんの時に特定の人との絆をつくることが『愛着』」，
スライド５「親と子の信頼関係は、その後の対人関係の土台になります」，
スライド６「人見知りは絆ができた証拠」

【参考】愛着の形成、言葉の発達と対人関係

○相手を大事に思う気持ちに支えられた絆を、発達心理学では「愛着」といいます。子供は、この心理的な絆を基盤にして、段階を経て他の人と人間関係を築くことを学びます。

○親子の絆に始まる他人との関係作りは、言語・非言語のコミュニケーションや社会的なやりとりを通して育ちます。言語のコミュニケーションとは「会話」であり、非言語のコミュニケーションとは「表情のやりとり」や「スキンシップ」等です。この会話ややりとり等のコミュニケーションが、愛着を育て形作っていきます。愛着が形成されることは、心の成長･発達段階の一つであり、対人関係や学習の準備になっています。

○おしゃべりができない段階の子供はまず、言葉によらないコミュニケーション（表情、スキンシップ、身振り手振り等）がとれる身近な人・世話をしてくれる人（愛着の対象。多くの場合は母親）と、心理的な結びつきを作ります。

○子供とその愛着の対象との間でやりとりする特定で個人的なコミュニケーションは､見知らぬ人には通じません｡コミュニケーションが成立せず不安や恐怖を感じて、泣いたり逃げ出したりしようとする行動が「人見知り」です。見知った人と見知らぬ人を区別して反応するこの「人見知り」は、愛着が形成されている証とも言え、発達のプロセスの一つの段階です。
　人見知りが激しいと「育て方に問題があったのかも」と自分を責めたり、知らない人に挨拶ができないからと子供を叱ったりする保護者がいますが、きちんと育てているから、しっかり育っているからこそ「お母さん（お父さん）以外の人はいや！」とメッセージを発しているのです。

○やがて、他人と共通のコミュニケーション手段である「言葉」が発達して、他人と会話ができるようになると、少しずつ親と離れていても大丈夫になります。子供が外の世界に向かっていく時期になると、他人とコミュニケーションをとるスキルは、欠かせません。コミュニケーションの多くは言葉を介して行われるので、言葉の成長・発達は、対人関係の力をつける要とも言えます。

「愛着について」及び「言葉の発達とコミュニケーション」についての詳しい解説は、指導用スライド教材Ⅳ「ふれあって、親子の絆を」の指導の手引に掲載している「指導者向けメモ」をご覧ください。

《主な掲載内容》
- ●愛着について
  - 1.「愛着（attachment）　～対人関係や学習の基盤となる」
  - 2.「愛着形成のコミュニケーション理論」
- ●言葉の発達とコミュニケーション
  - ・おっぱいのリズムは会話のリズム
  - ・話せる前は「アイコンタクト」で以心伝心
  - ・言葉を覚えるには「やりとり」は必要不可欠
  - ・言葉の間違いは訂正しないで
  - ・「分かる」と「話せる」には時間差あり
  - ・言葉が少ない子は「おしゃべり準備中」
  - ・「イヤイヤ」は初めての自分のアピール
  - ・自己主張を始める２歳からの子供とのコミュニケーション
  - ・４歳児は泣いている理由の説明はまだ無理
  - ・物事のルールが分かり始める５歳　　等

4　どうしてすぐに「ヤダ！」って言うの？

スライド４

このスライドで伝えたいこと

●幼児初期の子供の心理面の発達を説明し、子供への接し方についてアドバイスをします。

○ スライドの説明

●朝、洋服に着替える時に、子供が「イヤ～！」とギャーギャー泣いて、首を振り、手足をバタバタさせています。パジャマを脱いだ子供の周りには洋服、靴下、通園バッグが散乱しています。お母さんは、Ｔシャツを手に持って「これでいいじゃないの！なんで嫌なの？」と、すこしイライラした様子。お父さんは、どう接すればよいかわからず、少し離れたところで途方に暮れて困ったような顔をしています。

●園の服を着て鞄も持ったのに、子供が、登園を嫌がっています。床に座わりこんで「イヤ！行かない～！」と泣いて、足を床にドンドン打ち付けています。お母さんが、困って園に電話をしています。

○ 解説

●２歳になる頃の心の発達の特徴は､｢自己主張が始まる｣ことです。自己主張といっても､まだ理論だった自己主張はできません。“わがまま（自己主張）を通そうとする事は叱ってしつけなければならない”と考えがちですが､この頃の子供は､もっぱら｢やだ｣｢いや｣という言葉で自分の気持ちを伝えようとしているのです。発達心理学では自我が芽生え、初めて自分をアピールするようになる時期とされていて､人の成長の上では大切な過程です。また､脳の機能的な発達の観点からは､本能や欲求を司る大脳辺縁系や､｢言葉｣を司る大脳が順調に育っているとも言えます。この時期の子供が「やだ！」と言うのは、親に反抗したりたてついているのでなく、やりたいことや嫌なことをきちんと感じている、それを言葉で伝えることができているという、あって当然の発達の過程なのです。この時期を経て子供は、やがて人との関わりを作ることができるようになります。

●子供への接し方について
- ・子供が気持ちを落ち着けたり、切り替えたりできるような関わり方をアドバイスしましょう。
- ・「そうね、いやになっちゃったのね」と子供を受け止めて、落ち着いたら、選択肢を示して「どっちにする？」等と子供に選ばせるとよいです。
- ・遊んでいる場面では､兄弟姉妹や友達に「何をしているの？あら､楽しそうね」等と話しかけて気持ちをそらした上で､｢○○ちゃんもおいで？こっちで遊ぼう｡｣等、気持ちを切り替えられるよう、言葉かけを工夫します。
- ・「そんな事をする○○ちゃんは嫌いよ」「あなたはうちの子じゃない！」等、子供を否定する言葉は言わないようにアドバイスしましょう。言ってしまうと親自身も自己嫌悪で落ち込んでしまうものです。

●保護者の気持ちに対しては
大切な時期ということは理解していても、イラストの子供のように、手を付けられないと感じる場面も多く、保護者はイライラしたり叱ったりしがちです。これは多くの親が経験することです。
- ・親が感情的になったり、適当にあしらうのでなく、長い目でみるようにアドバイスしましょう。子供の発達の道筋を知れば、親も「そうか」「なぁんだ」と安心できます。
- ・手に負えなくてイライラする気持ちを汲みながら「子供の成長を一緒に見守りましょうね」「少しの時期、焦らずに、付き合ってあげましょう」等と励ましましょう。
- ・それでもうんざりするときは、親自身が上手に気持ちを切り替えることも大切です。時には子供の好きなようにやらせてみるのもいいでしょう。子供はきっと、一人では上手くできませんが、失敗して泣いてしまうのもまた、成長のための経験になることを伝えましょう。

5 うちの子、嘘つき !?

スライド５

このスライドで伝えたいこと

●対人関係のスキルを身に付ける上で欠かせない言葉の発達のうち、幼児初期の子供の「創造」や「言語」等の発達の特徴を説明し、子供への接し方について助言します。

○ スライドの説明

●イラストは、ぬいぐるみの腕がとれてしまった理由を説明をしている子供です。「ライオンがかじったから腕がとれちゃったの」。まさかそんなこと、あるわけはないのでお母さんも驚いていますが…。

○ 解説

●自己主張の時期を過ぎて、３、４歳頃になると、やりとりのための会話ができるようになります。また、ストーリー作りができるようになり、想像したことを盛り込んだ物語を話すようになります。ただし、考えたことや想像したことと現実の区別ができていないので、現実に何が起きたかを話そうとする時に創作したストーリーが入り込んでしまうことがあります。

　そのため、叱られる時や悪いことをした時に、とっさに、明らかにおかしいストーリー（大人にとっては「嘘」）で説明しようとすることがあります。

　大人から見ると“嘘をついた”ように思えることもありますが、この時期の子供は「嘘」とはどういうものなのかが分かっておらず、最初から騙そうという気持ちではない場合がほとんどですから、「嘘をつくような子供に育てた覚えはないのに …」と心配したり思い悩まなくても大丈夫です。これも発達の過程の一つです。

●子供への接し方について　～この時期の子供に注意をする時には～

・「どうして正直に言わないの？」と叱ったり、嘘をついたことを責めるのではなく、そのように言ってしまった子供の気持ちに寄り添いながら、出来事を一つずつ順番に聞いて、情景を思い出させる等、丁寧に問いかけてみましょう。

・嘘はいけないことだと教えることは大切ですが、「おかしいよ」「そんなはずないでしょ？」とただ否定したり叱ると、かえって子供は混乱してしまいます。

・また、この頃には子供は親の言うことを理解できるようになります。しつけだと思って「だから言ったでしょ？」「やっぱりダメな子ね」等、きつい言葉や否定的な言葉、マイナスの言葉をかけないようにしましょう。

●また、この時期の子供は、大人にとっては「？（はてな）」と思うような、その子供なりの経験や感性から出てくる言葉で出来事を言い表すこともあります。そのような時は、間違いを訂正するのでなく、子供の発想に共感したり、受け止めてみましょう。言葉の発達とともに、想像力や物事を結び付けて考える力（ストーリーを作る力）、推測する力、のびのびとした発想、感動したり共感する心等、目に見えないけれど大切な力が育っています。

　必要な時には「嘘はいけない」ときちんと教えますが、スライドのようにたわいのない出来事であれば、ストーリーを膨らませて「えー？そのライオンはどこにいっちゃったの？」等と想像力を伸ばしてあげる会話も良いです。

6 励まして、頑張って、達成させる。できたらぎゅーっと抱きしめてほめる。

スライド６

このスライドで伝えたいこと

●幼児後期の子供の心の発達の特徴を説明し、子供への接し方について助言します。

○ スライドの説明

●幼児期の後期は、積極的にいろいろなことをやってみるけれど、失敗したりうまくいかないことも多い時期です。イラストは、転んでしまった子供、縄跳びを跳べなかった子供、コマをうまく回せない子供と、その子供を励ましたり、できた時にしっかり褒めている大人です。

○ 解説

●発達心理学では、幼児期の後期は、他人との関わりが楽しい反面思い通りにならない体験にも遭遇する時期で、子供の心理面での発達課題（経験するべきこと）は、「主導性（積極性）と罪悪感（罪責感）」（E.H. エリクソン）と言われています。幼稚園や保育園等で子供の社会や人間関係が広がる中で、友達と遊ぶ楽しさと同時にいざこざや葛藤等いろいろな感情を経験して、心が育つ時期です。

●この時期の子供は、積極的に物事を行う意欲を持ち、自立心や好奇心が芽生えて新しいことをやってみたいと思います。同時に、他人から注意されたり否定されたりして自信を失くす経験もします。また、神経系の発達が著しく、様々な身体の動きができるようになりますが、洗練はされていないので上手くはできず、失敗することもあります。集団での遊びでは、勝ち負けを経験し、負けた悔しさ、負けるかもしれないことに挑む勇気や、負けたことを我慢する等、様々な心の発達が見られます。

　このように人と関わりいろいろな経験を重ねて、相手の考えを理解しながら自分の考えを伝えたり行動を選択することを繰り返して、問題を解決する、我慢する、あきらめずに挑戦する等、様々な態度を身に付けていきます。

●大人の関わりについて

・失敗することが多い時期ですが、失敗する経験や負ける経験をして、負けることへの耐性を身に付けることは、人としての成長・発達において必要なことです。大人は、“失敗しそうだからやらせない”のではなく、失敗した後に適切なフォローをしてあげることが大切です。

・子供が初めて挑戦することや少し困難なことへ挑戦しようとする時に、「やったことがないのにかわいそう」「やり方が分からないから危ない、やってはダメ」と全てを禁止しては、子供の経験を減らすことになってしまいます。安全を確認した上で、子供が行うことを見守り、励まして、達成感をもつ経験をさせましょう。

・また、失敗してしまったら、イラストにあるように「おしかったね、もう一回やってみたら？」と励ます。結果ではなくそのプロセスを認めてあげることが大切です。

・頑張って成功したら「がんばったね」「よく我慢できたね」「できるようになってよかったね」等と声をかけて、ぎゅーっと抱きしめて褒めてあげてください。

・こうした経験の積み重ねが、学童期に、努力する気持ちや、「得意」という意識の発達につながります。

家庭教育をめぐる現状と課題及び家庭教育支援

家庭教育をめぐる現状と課題、及び家庭教育支援について、文部科学省が設置した「家庭教育支援の推進に関する検討委員会」の報告書「つながりが創る豊かな家庭教育　～親が元気になる家庭教育支援を目指して～」（平成 24 年３月）より抜粋で紹介します。

●自然な教育的営みが困難になった家庭生活の変化

家庭生活は高度経済成長期を経て大きく変化しました。就業形態が変化し、多くの人々が職住分離の生活を営むようになり、また、家事の合理化が進み、家庭は消費の場ともなりました。

また、長時間労働などにより、家族が一緒に過ごす時間が十分とれず、家族がそれぞれ個別に行動することもよくみられるようになり、家庭生活を運営していく具体的な経験や能力が不足しがちな家庭も増えています。家族が小家族化し、自分の子どもを持つまで、赤ちゃんに接する経験を持ったことのない人も多くなっています。さらに、都市化が進み、空き地や原っぱなど子どもの身近な遊び場は減る一方、ゲーム、携帯電話などが普及し、少子化の影響もあって、子どもの遊び集団が身近な地域で成立しにくくなっています。

このように生活のあり様が変わっていくことで、生活のなかで自然に行われる教育的な営みは難しくなっています。

●子育て家庭の社会的孤立

子どもの人口や子どもを持つ世帯が減少することで、子どもや子育て家庭が、地域社会の中で少数派になっていきます。さらに地縁や血縁が弱まる傾向もあり、子育てのモデルが身近にない中、子育ての不安や負担感を抱え、自信が持てず、それぞれの家庭において、子育ての行き詰まり感を抱えやすい状況があります。約４割の保護者が、子育てについての悩みや不安を抱えています（家庭教育の活性化支援等に関する調査研究（平成 20 年、文部科学省））。

子育てについての不安や孤立は、一部の家庭におきている特別なことではなく、かなりの子育て家庭におこりうることです。

●社会性や自立心等の育ち

小学生の約 300 人に１人、中学生の約 37 人に１人が不登校であり、15 年前に比べ倍増しています（学校基本調査（平成 22 年、文部科学省））。また、児童生徒による暴力行為は増加傾向にあり、年間約６万件（平成 22 年度、文部科学省調べ）となっています。（中略）

こうした状況は、社会環境を背景としつつ、自分と社会をうまく結びつけることを支える力となる、家庭や地域、社会との関わりの中で育む社会性や人間関係能力、自立心の形成などに問題を抱える子どもがいることを示しています。

●家庭教育が困難になっている社会

家庭の教育力が低下しているという認識は、約 20 年前から広がってきました（「青少年と家庭に関する世論調査」（平成５年内閣府））。しかしこれは、世の中全般に見たときの国民の認識であって、必ずしも個々の家庭の教育力の低下を示しているとはいえません。「家庭の教育力の低下」の指摘は、子どもの育ちに関する様々な問題の原因を家庭教育に帰着させ、親の責任だけを強調することにもなりかねません。

（中略）現代の社会では、家族や職業のあり様や地域の人間関係が変化したことで、親子の育ちを支える様々な人間関係が弱まり、子どもを持った大人が親になっていくこと、また、子どもが家庭に生まれ、親と子の間で、また地域や社会との間で、様々な関わりを持ちながら成長発達していくことが、ごく自然に行われることが難しくなっています。それに加えて社会経済の大きな変動が、親から子へ、そして次の世代へと知恵や習慣を伝承していくような家庭教育を困難にしています。

同委員会は、家庭教育支援のあり方の基本的な方向性の一つに「親の育ちを応援する」ことを挙げ、「発達段階に応じた関わり方についての学習が必要」としています。

このような現状の中で、近年、子供に良い行動をして欲しい時や望ましくない行動をやめて欲しい時、子供にどう教えるのかを学ぶための講座や子育ての仕方を学ぶプログラム等も提供されるようになりました。

神奈川県茅ヶ崎市が開催する講座で子供への伝え方、褒め方、注意の仕方を練習する「怒鳴らない子育て練習講座」、イギリスで開発され NPO 法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが日本に紹介している子供との向き合い方を学ぶプログラム「ポジティブ・ディシプリン（前向きなしつけの意）」、カナダで開発されプログラムを進めるファシリテーター等の資格認定機関としてカナダ保健省から公認されているノーバディーズ・パーフェクト・ジャパンが進めている親支援プログラム「ノーバディーズ・パーフェクト（完璧な親なんていない）」等です。

これらはいずれも、具体的･実践的な内容で、子育て中の親同士が学びあい、親として育っていくためのプログラムです。

※３つの例の参考図書、ホームページ等は巻末で紹介しています。

第２章

自立・自律を目指して生活の力を育てる
～いろいろな場面で社会性の基礎が育つ～

子供が基本的な生活習慣を身に付け自分で生活の様々なことを成し遂げることができ（自立）、また自分で生活をコントロールできること（自律）は、社会性の基礎になる大切な力の一つであり、この力を身に付けることは乳幼児期からの家庭教育の重要な役割です。

本教材では、この力を「生活の力」と呼び、第２章では、この生活の力を身に付けるために個々の家庭で取り組んでいただきたいことや、そのヒントをスライドにしました。

少子化・核家族化、生活のあり様の変化や地域のつながりの希薄化等により、家庭教育が困難な時代になっていると言われている現在、子育てに不安や負担感を抱え、自信が持てず、悩みを抱えることは、一部の家庭の特別な問題ではありません。

子育ての方法を学びたい、教わりたいと思っている親を地域で支えるために、この章のスライドをぜひ御活用ください。

7 周りの力を借りて、家庭で生活の力の基礎を作りましょう

スライド７

このスライドで伝えたいこと

●このスライドでは、子供のしつけや家庭教育を一人で抱え込み、悩んでしまいがちな保護者に対し、家族、地域等周囲の力を借りて子供を育てることをアドバイスします。

○ スライドの説明

●親子の周囲には様々な地域の人や施設が存在することを同心円の広がりで示しています。親子に身近な人や施設ほど（実際の距離とは別の意味で）、より中心に近い所にあります。

●子育てや家庭教育について不安や悩みを抱えながらも地域に知り合いがおらず、一人で抱え込んでしまう親に、周囲の力を借りることや、いろいろな人と関わることで子供も成長していくことをアドバイスしましょう。

○ 解説

●子供が生活について自立・自律できることを目指して、家庭でいろいろな生活の力を身に付けさせようと考えても、親でも知らないこともあるものです。

　また、地域社会の中の様々な他人との関わりの中で子供が育った時代とは異なり、地域のつながりが減る傾向があり、親と子の関係が家庭内で閉じたものになり、家庭教育の不安や悩みを親だけが抱え込むことは、一部の特別な家庭の問題ではなくなっています。

●そのような状況にいる親には、一人で抱え込まずに、周囲の力を借りることを伝えましょう。

　地域には、いろいろな人がいて、いろいろな施設があります。地域で暮らしていると、子供が縁で、他人とつながることも増えるでしょう。保健所や病院、幼稚園・保育園、子育ての仲間や近隣の住民等、親子を取り巻く環境の中でいろいろな人とつながりができると、親も子も地域の関わりが生まれ、人間関係が広がります。

●いろいろな人との関係を通して経験し、学ぶことがたくさんあります。

　子供は地域の人と接することで他人とのコミュニケーションを経験し学びます。また、親は、地域の子育て先輩から子育てについて学ぶことができます。

　地域は支えあう場所であり、他人との関わりを持つ場所です。親だけで教えようと頑張るのでなく、周りの力も借りて少しずつ教えていきましょう。家庭と地域で、子供を育てていきましょう。

8 こんなこと、できるかな？

スライド８

このスライドで伝えたいこと

●乳幼児期に身に付けたい具体的な「生活の力」①　基本的な生活習慣（特に身辺の自立）を子供に教えることについてアドバイスします。

○ 解説

●一般に、生活面において大人が「自分のことは自分でやる」ことは当たり前ですが、その土台となる基本的な生活習慣や生活のスキルは家庭で身につきます。身の回りのことを自分でやり、いずれ一人で生活の自立・自律ができるように、生活のスキルを子供に教えていきましょう。

●親がやると手早く失敗なくできますが、子供が生活習慣を身に付けにくくなります。子供は最初は上手にできなくて当たり前です。子供が一生懸命に取り組むのを見守り、できないことは手伝い、後はゆったり構えて待ちましょう。自分のことを自分でできるようになると、自信が付き、意欲を持って取り組むようになります。すると一層身辺の自立が進みます。

●生活にはいろいろな動きが含まれていますから、手先や体の使い方も経験し、動きの経験を重ねることでうまく、器用にできるようになります。

○ スライドの説明

●生活習慣の中で、子供が自分でやろうと取り組んでいる場面をイラストにしました。

・洋服を着る　　いろいろな難しい動きが含まれますが、一人でできると自信が付きます。
・ご飯を食べる　自分で食べることは健康な生活に必要なスキルです。規則正しい食事習慣や食事のマナーも教えましょう。
・体を洗う　　身体の清潔を保つ習慣を身に付けます。
・歯を磨く　　歯と口の健康のために、むし歯の予防と口を清潔にする習慣を身に付けます。
・トイレに行く　健康な生活のために、排泄の習慣を身に付けます。

●生活には、服の袖に腕を通す、反対側の袖に腕を通す、かがんでズボンやスカートをはく、体を洗う等の体全体を使う動きや、ボタンを掛ける、スプーン、フォーク、箸を持つ、食べ物をすくって口に運ぶ、歯ブラシで歯を磨く等細かな手先・指先の動きが含まれるので、子供には難しくて最初は時間がかかります。「うちの子はまだ一人でできない…」等、心配になったり焦ったりしますが、すぐにできて身に付くものではありません。ゆっくり見守って、できたら褒めてあげましょう。

《教材作成委員からのアドバイス》

生活の自立は焦らずに…親の心得は《まみむめも》！

ま … **待**つ
み … **見**守る
む … **無**理をしない
め … **目**を配る
も … ゆとりを**持**つ

イライラしないようにするためには、時間に余裕があって、親が急いでいない時に挑戦するといいですね。

9　就学前に身に付けたい、８つの生活習慣

スライド９

このスライドで伝えたいこと

●乳幼児期に身に付けたい具体的な「生活の力」②　年長の５歳、６歳の就学前の子供の保護者に、小学校に入学する前に家庭で身に付けておきたい生活習慣について説明します。

○ 解説とスライドの説明

●入学の直前に話すよりも、半年から２、３ヶ月くらい前に話をして、家庭で実際に練習したり取り組んでみる期間をとれるようにしましょう。

●この８つの項目は、小学校の校長先生や保育を専門とする大学の先生に教わって作成したものです。

【1】早起き・早寝は、正しい生活リズムの基本です。起きる時刻、寝る時刻を決めて、リズムを整えましょう。特に夜更かしは子供の成長にも悪影響ばかりですから大人の生活に付き合わせないように気をつけましょう。早起きする習慣がついたら、目覚まし時計などを使って、一人で起きるようにしてみます。一人で起きられたら褒めましょう。「自分でできるんだ」という自信がつきます。

【2】挨拶はコミュニケーションの第一歩です。家族はもちろん、近所の人や幼稚園・保育園の先生、友達にも元気な声で挨拶をしましょう。また、人と話すとき、話を聞くときはきちんと相手の顔を見る、元気よく話せるなど、人と気持ちよくコミュニケーションできるマナーも身に付けておきたいですね。

【3】朝ごはんは、一日を元気にスタートするためのエネルギー源です。まずは一品からでも、必ず食べる習慣を身に付けましょう。《関連》教材Ⅱの「朝ごはんのパワー」も参考にしてください。

【4】一人でトイレを済ませられるようにしましょう。朝、登校する前に家庭でうんちをすることが習慣になるといいです。また、学校では洋式トイレが少ないところもあるので、和式でも使えるようにしておくといいですね。

【5】天気が良い日には、屋外で体を動かして遊びましょう。昼間にたくさん活動することで、疲れて夜はぐっすり眠れますし、おなかが空くのでごはんもしっかり食べられます。外に遊びに行くときには、家の人に、どこで誰と遊ぶのか、何時に帰るのかを必ず伝えましょう。

【6】外から帰ってきたら手を洗い、うがいをしましょう。体を清潔に保つことは、健康な生活を送るために大切なことです。洗顔や食後の歯磨き、入浴等も、清潔を保つ習慣として身に付けましょう。

【7】一日のうちで、テレビを見たりゲームをする時間を家族で決めましょう。時間を決めずにテレビを見てしまうと夜更かしになりやすいので、どうしても見たい夜の番組は録画をする等して大人も時間を決めましょう。

【8】朝起きた時やお風呂に入るときなど、自分一人で着替えができるようになりましょう。小学校の生活では、体育やプールなど、一人で着替える場面があります。

●さて、できているでしょうか？まだできていなかったら、入学時を目標に身に付けられるよう、親子一緒に取り組んでみましょう。

10　生活や遊びの中で、コミュニケーションの言葉を学びます

スライド 10

このスライドで伝えたいこと

●乳幼児期に身に付けたい具体的な「生活の力」③　他人とのコミュニケーションの基本になる挨拶や気持ちを伝える会話について説明します。

○ 解説

●他人と気持ちよく接したり、感謝やお詫び、思いやりを伝える等のコミュニケーションには言葉が欠かせません。他人とうまくコミュニケーションをとるための、挨拶や気持ちを伝える会話は、自立のために身に付けたい生活の力の一つです。

●照れて上手く言えない子供もいます。子供によって、一人一人性格も成長も違うので、言えなかったからといって叱ったりするのでなく、手本を示しながら、言えるようになるのを待ちましょう。

●子供は大人の姿を見て、他人とのコミュニケーションの方法を学びます。親だけでなく、周りの大人も手本になるようにしましょう。コミュニケーションの会話で大切なことは、気持ちを込めて言うことですから、挨拶、お礼（感謝）、お詫び等の気持ちを、言葉や態度で示す方法を、大人が子供に示すことを意識しましょう。

○ スライドの説明

●子供の日常生活で、言葉を使って他人とのコミュニケーション（挨拶や会話等）をとる場面をイラストにしました。

・「ごめんなさい」
（友達に借りた飛行機のおもちゃの翼を折ってしまい、謝ります）
・「貸してあげる」／「ありがとう！」
（友達にぬいぐるみを貸しました。貸してもらった子はお礼を言います）
・「おじゃまします」／「いらっしゃい」
（友達の家に遊びに来て、玄関で挨拶します。友達も歓迎の意味の言葉を返します）
・「ありがとう」
（祖父・祖母に誕生日のプレゼントをもらった時に、お礼の言葉を言います）
・「こんにちは」
（お父さんの知り合いの近所の人に会った時に、挨拶をします）

○ 投げかけの例

●他にも生活の中のいろいろな場面で使う挨拶の言葉がありますね。
（グループ等で話し合って）いろいろ出し合ってみましょう。
（例）
・（日常のあいさつ）「おはようございます」、「こんにちは」、「こんばんは」
・（寝る時に）「おやすみなさい」
・（食事の時に）「いただきます」、「ごちそうさま」

11 我が家のお手伝いを決めよう　～生活の体験は、自立への準備、文化の伝承～

スライド 11

このスライドで伝えたいこと

●乳幼児期に身に付けたい具体的な「生活の力」④　役割を決めてお手伝いをさせることで生活の経験を重ねることができ、生活のスキルが身に付くことを伝えます。

○ 解説

●自立の基礎になる生活のスキルは、手伝いを楽しく繰り返し経験することで、いろいろな生活の経験を重ね、身に付いていきます。また、手伝いは、勤労の大切さを知ることにつながり、勤労の態度が身に付きます。役割をやり遂げることで達成感をもち、新しいことに挑戦するやる気も生まれます。

●家の中での子供の役割を作りましょう。
・毎日の暮らしの中で子供ができることを、その子の「係」にします。
・新しいことに挑戦することは、子供が成長するチャンスになります。少しハードルが高い作業でも、チャレンジさせてみましょう。３歳、４歳、５歳と、少しずつお手伝いの内容をレベルアップさせると、やり遂げた時に達成感を持ち、自信ややる気にもつながります。

●大人が一緒にやってみて、手本を示しましょう。
・子供は親等の大人のすることを真似をしてやり方を学ぶので、まず最初に大人がやってみせます。大人のやり方がモデルになりますから、分かりやすく教えます。
・すぐには大人と同じようにできなくても、励ましたり、上手にできるコツを教えたりして、焦らずに見守りましょう。できるようになった時には褒めてあげましょう。
・子供がやる気になるように楽しくできるような工夫をしましょう（夏なら水を使うお手伝いをさせる等、子供が楽しんでできる作業をさせるのもよいでしょう）。
・親子で楽しく取り組む工夫をしましょう。仕事をしている人は、休みの日に子供に付き合って手本を見せたり一緒にやってみる時間を作ると、親は子供の様子を見ることができ、子供は自分がしっかり頑張っている姿を親に見てもらうことができます。

●生活の力をつけることは、生活文化を伝承することにもなります。日本では一年の生活に四季を反映して生活を味わい深くする文化の側面もあります。親から子へ、生活のスキルというバトンを渡すとともに、文化も伝えていきましょう。

○ スライドの説明

●イラストは、子供が家庭で手伝いをしている場面です。
・掃除をする……家の前の落ち葉を箒で掃いています。季節を感じることができるお手伝いです。
・食器を並べる……箸と皿を並べています。食事のマナーを学ぶことができます。
・洗濯物をたたむ……父親と一緒に洗濯物をたたんでいます。自分のことは自分でやる意識を持ちます。
・買い物に行く……スーパーで野菜を選んでいます。食べ物や生活に必要な品を学ぶことができます。
・おもちゃの片づけ…積木の箱、ぬいぐるみの箱、と分けて子供が分かりやすいよう工夫して、片付けるやり方の手本を示しています。

●各家庭での子供の役割や手伝いについて、工夫や事例を出し合って参考にし合いましょう。

12 文化を伝承する　～季節とともに～

スライド 12

このスライドで伝えたいこと

●家庭で伝えることができる日本の四季や伝統的な文化をイラストで例示します。

○ 解説

●日本には四季があり、日本に暮らす私たちは、四季折々の旬の食べ物、季節の動植物、季節の天候等、四季の豊かな自然と結びついた生活を送ってきました。様々な季節の行事も行われてきました。季節の移り変わりとともに自然との調和を図る暮らしをしてきた日本人の生活中には、自然からの教えや生活の知恵がたくさんあります。

●近年、都市での生活は便利で快適になりましたが、一方で、自然を感じ体験する機会は減少しています。
　例えば、日本では食料は豊かになり、季節に関係なく一年中いろいろな食べ物が手に入るようになりましたが、おいしくて体に良いと言われる旬の食べ物が分かりにくくなります。都市部では住宅や交通の環境が変化して自然は減少し、樹木や草花等の植物や、野山の昆虫などに接して季節を感じる機会も減りました。また、家庭では日々性能が高度化する電化製品の使用が普及し、夏の暑さや冬の寒さを避けることも可能になりました。
　しかし、自然に触れる機会は、命を大切にする、美しさに感動する、自然の厳しさに対する畏怖等の気持ちや態度を育むことにつながります。また、自分が育った郷土の自然や文化は、一生にわたって自分の精神的な支えとなったり、豊かな心の潤いになる側面もあります。
　日本の四季について、また昔から季節とともに営まれてきた生活の知恵や工夫、季節の行事や地域の文化等を、家庭の生活を通して子供たちにも伝えていきましょう。

○ スライドの説明

・季節の旬の食べ物、代表的な料理、植物、昆虫等の生き物、季節の行事や生活道具のカットです。
・春夏秋冬の季節ごとに使用する場合は、スライド 13 から 16 を使用してください。
・次ページに、スライド 12 から 16 のカットの食べ物、植物、生き物等の名前があります。
・旬の食べ物や季節の料理については、教材Ｖのスライド 1,2,3 も参考にしてください。

【参考】

●文部科学省学習指導要領では小学校の「生活科」の目標や内容についてに次のように書かれています。
　「目標（2）自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然のすばらしさに気付き、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。（3）身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して，自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができるようにする。（4）身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに，それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることができるようにする。」
●小さい頃から四季の自然に親しむことは、小学校での学習にもつながります。

13 季節とともに　～春～

スライド 13

14 季節とともに　～夏～

スライド 14

15 季節とともに　～秋～

スライド 15

16 季節とともに　～冬～

スライド 16

　P16、P18、P19 のスライド 12 から 16 は、季節の旬の食べ物、代表的な料理、植物、昆虫等の生き物、季節の行事や生活道具のカットです。

春：（食べ物）菱餅、菜の花、つくし、草餅、よもぎ、たけのこ、いちご、柏餅、ちまき、山菜
　　（植　物）菜の花、れんげ、つくし、たんぽぽ、桜、チューリップ、たけのこ、山菜
　　（生き物）ななほしてんとう虫、おたまじゃくし、蝶（ちょう）、つばめ
　　（行事等）ひな祭り（雛人形）、鯉のぼり、かぶと（新聞紙の手づくり）、菖蒲湯、田植え、茶摘み

夏：（食べ物）さくらんぼ、鮎、かき氷、素麺（そうめん）、すいか、とうもろこし、トマト、うな重
　　（植　物）あじさい、ひまわり、朝顔、（さくらんぼ、とうもろこし、すいか）
　　（生き物）鮎、あまがえる、かたつむり、あぶら蝉、くわがた、かぶとむし
　　（行事等）てるてる坊主、七夕飾り（笹飾り）、打上げ花火、風鈴（ふうりん）、浮き輪、うちわ、扇風機、テント（キャンプ）

秋：（食べ物）月見団子、さんま（塩焼き）、栗、しいたけ、ぶどう、さつまいも、千歳飴、りんご、柿、にんじん
　　（植　物）コスモス、菊、すすき、どんぐり、いちょう、まつぼっくり、彼岸花（ひがんばな）、
　　（栗、しいたけ、ぶどう、さつまいも、柿、にんじん）
　　（生き物）鈴虫、赤とんぼ、
　　（行事等）敬老の日、芋ほり、栗拾い、七五三、稲刈り

冬：（食べ物）大根、みかん、白菜、蟹（かに）、年越し蕎麦、おせち、雑煮、鍋料理、七草粥
　　（植　物）梅、水仙、福寿草、（大根、みかん、白菜）
　　（行事等）コマ、杵と臼（餅つき）、こたつ、年越し蕎麦、門松（かどまつ）、おせち料理、羽子板（羽根つき）、鏡餅、年賀状、
　　書初め、和凧（凧あげ）、かるた（百人一首）、豆まき（節分）、雪だるま

他にも、いろいろな食べ物、植物、生き物などで季節を感じることができます。保護者同士や子供を交えて話し合い、発表し合いましょう。

【スライド 13 ～ 16 の使い方】

○この 4 枚のスライドは、季節の旬の食べ物、代表的な料理、植物、昆虫、行事等をイラストにしたものを、春夏秋冬に分けて 1 枚ずつのスライドにしたものです。

○各スライドには、5 マス× 5 マス、合計 25 マスあり、（中央に文字があるので）カットは 24 個あります。

○遊び方の例
親子で楽しく季節の自然と触れ合う「季節の○○探し」
カットと同じもの（実物）を見つけて数を競ったり、ビンゴ風なゲームのカードとして使えます。

《遊び方》
・カットと同じ四季の食べ物、料理、植物、昆虫、行事、生活の工夫等を身の回りで探します。
・カットと同じもの（実物）を見つけたら「○」印をつけます。

《楽しみ方を増やす工夫》
・数を競う
「1 週間」等、一定の期間を決めて、日常生活の身近な所で探して、数を競います。
※個人戦の他に、親子、兄弟姉妹の中でチームを作って力を合わせて探すこともできます。

・ビンゴ風ゲーム
「○」印をつけたマスが、縦、横、斜めのいずれか一列に並んだら勝ち。
中央の「春・夏・秋・冬」の文字は、最初から「○」印をつけてよいことにします。
※個人の他に、親子、兄弟姉妹の中でチームを作って力を合わせて探すこともできます。

・旅行の記念に
旅行等の時に、家族みんなで探して、記録写真を重ねて貼り、旅行の記念にします。

○他にも、いろいろ工夫をして楽しく季節を感じることに使ってください。

17 生活のルールは我が家から

スライド 17

このスライドで伝えたいこと

●子供が社会での生活における対人関係のマナーや、生活のルールを最初に教わる場所は家庭であること、身近なところで生活のルールを身に付けることを伝えます。

○ 解説

●社会での生活には、他人と気持ちよくコミュニケーションをとったり大勢の人と共に同じ社会で暮らすための、マナーやルールがあります。子供が最初にそのマナーやルールを学ぶ場所は、家庭です。

●子供は、３歳くらいから簡単なルールを理解し、従うことができるようになりますが、気分に左右されることもよくあります。親に協力的で聞き分けの良い子だったかと思うと反抗する等、子供の行動がよく変化します。ルールをわざと破ることもあります。子供がルールを理解できるようになっているかを親が理解して、何が正しいのかを教えてあげてください。

●「ルールを守ること」を教えるために
・褒められることによって、良い行動の仕方、振舞い方を学んでいきます。
・父親・母親がよく話し合い、ルールに一貫性を持つことが大切です。
・大人が見本です。親もそのルールを守るようにしましょう。

○ スライドの説明

●挨拶をする、寝る時間を守る、食事のマナー、交通のルール等、毎日の生活を通して生活のルールや対人関係のルール・マナーを教えることができる場面をイラストにしました。

■挨拶は家庭から
・「行ってきます」／「いってらっしゃい」　・「ただいま」／「おかえりなさい」
・「ありがとう」「ごめんなさい」、「おはよう」「おやすみなさい」
■子供を安心させるルールを教えます（交通のルール等）
・「青になったら渡るんだよ」
■生活リズムにもルールを作りましょう
・「寝る時間だよ」「もうテレビ（ゲーム）は終わりだよ」
■役割をもたせ、やり遂げさせる（生活に関する手伝い等）
・「○○ちゃんの係だよ」
■食事のマナーを教える
・食事の挨拶、姿勢、マナー等

●他にも、いろいろな場面があります。親同士の話合いで、事例や工夫を出し合ってみましょう。

18 よい行動を教えることは、子供への大切な贈り物です

スライド 18

このスライドで伝えたいこと

●子供が社会での生活における対人関係のマナーや、生活のルールを最初に教わる場所は家庭であること、身近なところで生活のルールを身に付けることを伝えます。

○ 解説

●子供は、年齢によって分かることやできることが違います。
２歳児に５歳児のように振舞うことは無理で、できないからと厳しく叱っても、その意味は理解できず、かえって好奇心ややる気など前向きな気持ちを削ぐことになりかねません。

●我慢や挨拶等、良い行動ができた時にしっかり褒めましょう
・親や大人に褒められれば子供は嬉しくなります。嬉しいことは繰り返しやろうと思います。褒めることは、子供が良い行動を身に付けることの援助になります。
・悪いことをした時だけ叱るのでは、お父さん・お母さんの注意を引くには悪いことをすればよいと思ってしまうことがあります。

●まずは大人が手本を示しましょう
・子供は良い行動のやり方がわかりません。大人の行動を見て、真似をします。小さい頃に、家庭の中で簡単なルールを教える時には、子供が分かりやすいよう、行動に移しやすいように工夫して、まずは大人がやって見せましょう。
・ルールを理解できるようになってきた子供に、しっかりとルールやマナー守ることを教えるために、親や大人も、社会のルールを守り、良い手本を示しましょう。

●危険なこと、いけないことはきちんと教えましょう
・「ダメ！」「いけません」とだけ言うのでなく、子供の年齢に合わせて、教え方を工夫します。
・していい場所、いけない場所をはっきりと決めて、そのルールに一貫性を持たせます。
・ルールが理解できない小さな子であれば、やってほしくないことをしていたら注意をそらしたり、やってほしくないことはできないように環境を整える等、大人が工夫しましょう。

●愛情と甘やかしは違います
・ルールやマナーを守ることは、将来、大勢の他人と共に同じ社会の一員として生きるために必要な「生活の力」の一つです。子供がルールを理解できる年齢になったら、ルールを理解して守り、良い態度や行動をとることをしっかり教えましょう。それは子供が自立・自律して社会で生活を送る時に子供の将来に役立つもので、親から子供への大切な贈り物と言えます。

●感情的に叱る（怒る）ことと、良い行動を教えるためのしつけは違います
・心や体を傷つける叱り方は効果がなく、虐待につながることもあります。また、近年の発達心理の研究では、強制するしつけスタイルよりも、子供の気持ちに共感しながら教えるしつけスタイルの方が、子供の語彙が多いという調査結果もあります。

●して欲しくない行動にどう対応したらよいのか困るときもあります
・子供が「いけないこと」だとわかっているか、眠い・具合が悪い等の体調の理由ではないか、寂しい・退屈等の気持ちの問題ではないか等、行動の背景についても考えてみるとよいでしょう。
・「いけないこと」を伝えるには、繰り返して丁寧に伝えていきます。子供の辛い気持ちが背景にあるのなら受け止めてあげましょう。
・「『いけないこと』を○○ちゃんがすると、ママ／パパも悲しいよ」等と、親の気持ちを伝えてみましょう。感情的に叱ると保護者も疲れてイライラしますが、ゆっくりと穏やかに丁寧に会話を交わすと、次第に親子共に安定してきます。

メ　モ

第３章
集団の中で育まれる社会性
～幼児教育・保育の意義～

乳幼児期の子供は、成長するにしたがって一人遊びから友達と一緒に遊ぶようになります。

集団的な遊び、協同的な遊びの中では、一緒に遊ぶ楽しさを経験し、集団の一員であることを自覚し、仲間意識が芽生えます。もっと楽しく遊ぶために自分たちで約束事や決まりを作ることも経験します。やがて子供同士のかかわりの中で自分を発揮できるようになります。

時にはおもちゃを取り合ったり、やりたいことを主張してぶつかり合うなど、友達との間で様々な葛藤も経験します。けんかもします。相手とうまくやりとりができないために、大人に気持ちを代弁してもらったり共感してもらったりしながら、少しずつ、相手の気持ちを理解したり、自己主張したり、時には我慢をすること、感情をコントロールすることを学びます。

子供同士の集団の中で、豊かな心や社会性が身につき、培われていきます。子供たちは互いに影響し合いながら一人一人が成長しているのです。

幼児教育や保育では、こうした集団での生活経験や遊びの経験を重ねることができることが家庭での教育との大きな違いであり、子供同士の関わりを大切にして集団の中で子供が成長することを促し、援助することが重要な役割の一つです。

第３章では、人としての成長に欠かせない子供同士の関わりの大切さを説明するとともに、集団での幼児教育や保育の意義について伝えます。

19 遊びの中で経験する社会性

スライド 19

このスライドで伝えたいこと

●子供同士の集団での遊びを通して様々な人間関係の経験を重ねることで、自発性と共に、思いやり、感謝、ルールを守る意識等、協調、協同の意識が芽生え、育つことを説明し、その大切さを伝えます。

○ 解説

●集団で遊ぶことの大切さ

　会話ができるようになり、簡単なルールが分かるようになる３～５歳頃、子供は徐々に友達と遊べるようになり、人間関係が広がります。同年代の子供の集団や異年齢の子供との関わりの中で、子供はたくさんのことを学び、いろいろな力を獲得しています。

●ルールを守ることでもっと楽しくなる経験

　自分の思い通りに振舞うのでなく、集団遊びのルールに従うことで、一人の遊びでは得られない楽しさや興奮を味わいます。そのようにして、ルールに従う意味を理解し始めます。幼児期の後期になると、自分のやりたいことを伝え合うだけでなく、子供同士でやり取りをしながら新しいルールを生み出し、それを受け入れることができるようにもなります。

●かつては、家庭や地域に、このように同年代や異年齢の子供の集団で遊び、様々な経験をする機会がありましたが、地域のつながりが少なくなっている現在は、あえて異年齢や集団で遊ぶ機会を作らなくては経験できない状況があります。

　幼稚園･保育園にはこうした経験を重ね、社会性が育まれる場面がたくさんあり、幼児教育･保育の場は、この大きな役割を担っていると言えます。また、それこそが集団保育の意義とも言えます。

　保護者には、子供が幼稚園・保育園で経験した話を聞いてあげるように勧めましょう。一緒に喜んだり驚いたりすることで、子供の成長が分かり、親子のコミュニケーションにもなります。

●子供の発達は様々なので、こうした社会性を、長い期間をかけて身に付ける子供もいます。今は、大人になってから必要な社会性のための基礎になることを毎日経験している時期なので、すぐに理解して行動に移せる子供ばかりではありません。親や大人は長い目で子供を見守ることを心がけましょう。

○ スライドの説明

子供が集団で遊んでいるいろいろな場面のイラストです。

●「順番にね」「交代でね」

　皆で順番にブランコや滑り台で遊びます。年長の子供が「順番でね」「交代だよ」と教えています。

　小さな子供も順番を待つという約束を守っています。

●「半分こしよう」

　年下の子供に、おやつを半分あげています。

●「タッチされたら鬼だよ」

　ルールにしたがって、鬼遊びをしています。皆で相談してルールを変えたり、新しく作ったり付け加えたりして遊びを楽しくしていく様子もしばしば見られます。

20 友達と一緒に遊ぼう！　～幼児期に育てたい社会性～

スライド 20

このスライドで伝えたいこと

●具体的な場面を示して、集団の中で経験し、学び、育つことの大切さを説明します。

○ 解説

●同年代の子供同士が関わることで、自発性、協同･協調の態度や、ルールや約束を守ること等社会的な態度を身に付けていきますが、集団の遊びの中では、自分の思いとは異なる方向に物事が進みいざこざになることもあります。葛藤の中で、相手の気持ちを考えたり、自分の思いを相手に言葉で伝えたりすることの大切さ、主張したり、交渉したり、譲ったり、謝ったり、許したりすることの経験を重ね、他者を思いやることを覚えていきます。

　また、我慢や葛藤の体験は、自分を主張することの調整・コントロールを体験することにもなり、自律という観点からも大切な経験です。ケンカして譲り合う、自己主張して折り合う、一緒に楽しむ等、こうした関わりの中で社会性の基礎、人格形成の基礎が培われます。

●友達と一緒に何かを作り出して遊ぶ中で、一人では思いつかなかった発想の遊びが生まれたり、力を合わせることで物が作り出される経験をします。

●こうした「協働」や「協調」の意識も、同年代の子供の集団、異年齢の子供との遊び等の関わりの中で学ぶことです。

○ スライドの説明

●同年代の子供同士で遊んでいる場面です。みんなでロボット作りをしているところです。

いろいろな子供がいますが、この一つの場面の中にも、様々な学びがあります。

・ロボットの手を付けようとしている子供…「僕が手を作る～！」と、自分がやりたいことをハッキリ伝える（自己主張する）ことができています。

・ロボットの右目と左目を分担して、色を塗っている子供・・・「何色にする？」「私は青くする！」相談をしながら一緒に色を塗って作り上げていくことを楽しんでいます。協同することの楽しさを体験しています。

・少し離れて、折り紙を貼り付けたいけれどどうしていいか分からなくて困っている子供・・・「どんな言葉を言えば仲間に入れるかなあ」友達の様子を見ながら、自分から言い出すチャンスです。

・そっぽを向いている子供・・・集団の中にはこの作業や遊びに関心を持たない子供もいます。

・離れている友達に声をかけている子供・・・「こっちにおいでよ。一緒にやろうよ。」入りたそうな友達を誘っています。

・ケンカしている（物を取り合っている）子供･･･やりたいことが同じになってしまいました。二人とも､自分のやりたいことはしっかり主張できたようです。この後、「半分ずつやろう」とか「交代でやろう」等の解決策が生まれるといいですね。

21 集団の中で学ぶもの、身に付く力

スライド 21

このスライドで伝えたいこと

●子供同士が協同して遊びや活動を行っている具体的な場面を示して、集団の中で経験し、学び、育つことの大切さを説明します。

○ 解説

●集団の中で協同性が育ち、自発性が育まれます。

幼児期に育まれる自発性は、生涯にわたって、何かを積極的に学んだり、変えていこうとしたりする力の根っこになります。この自発性は、子供一人で獲得できるものではなく、同年代の子供の集団や大人との関わりを通して育まれます。

子供は、大人や友達がやっていることや作っている物を見て、自分も真似をしたりしながら、自ら行動するようになります。また、友達と一緒に遊ぶ中で、お互いのやりたいこと、作りたいイメージがぶつかり合うからこそ、自分のイメージや考えがより確かなものになります。

仲間関係ができると、自分の思いやこだわりを積極的に友達に伝えながら遊びを深めます。うまく伝わらなかったり、思いがぶつかったり、すれ違ったりもしますが、折り合っていくことを経験します。友達と一緒に遊ぶためには、自己主張をしながらも時には相手の話を聞いたり我慢をしなければならない時があることを知っていきます。

集団の生活や遊びに慣れてくる５歳頃には、仲間と一つの目的を共有して、実現するために協同して遊びや作業ができるようになります。お互いの良さや得意なことを活かしたり、作業の進め方を相談したり、役割を考える様子も見られます。自分も相手も楽しく、気持ちよく過ごせる関係性を求めて、協同性が育まれていきます。

そうして一人では得にくい楽しさや作業に集中する気持ちを経験したり、他人と対立したり折り合ったりしながら、自分も相手も楽しくいられる関係、お互いが満足できる関係性があることを学びます。

集団の中で自発性が育まれ、自発性を育みながら更に多様な人間関係を経験し、関係を豊かに広げていくことで、子供の社会性が育っていきます。

○ スライドの説明

●都内の幼稚園で、園児が協同で物づくりに取り組んだり、友達と運動遊びや砂遊びをしている様子です。

・物づくりの場面では、何か相談したり、作業を分担している様子が見られます。友達の作業を手伝ったり、教え合っていることもあります。

・運動遊びの場面では、ルールを守り勝ち負けのある遊びを楽しみます。時には子供同士で新たな遊び方を生み出すこともあります。

写真提供：学校法人町山学園　まどか幼稚園（東京都葛飾区）

22 保護者の皆さんもいろいろな関わりを。

スライド 22

このスライドで伝えたいこと

●保護者同士も、親という同じ立場の集団の中で経験し、学ぶことがあることを伝えます。

○ 解説

●幼稚園や保育園等での子供同士の関係からは、保護者同士の集団も生まれます。そこは、保護者同士で学び合う場になります。

●共に子育てをする親同士、支えあえる仲間ができれば、ちょっとした悩みや不安を相談したり、気持ちを分かち合うことで励まされたり楽になったりします。

●地域に知り合いが増えて、親も子も社会が広がります。

●保護者同士の付き合いを通して、保護者の社会性も向上します。

○ スライドの説明

●都内の幼稚園での保護者同士の関わりの様子の写真です。

・送迎の際に立ち話をしています。
ちょっとした情報交換は実はとても大切です。立ち話ができる子育て仲間を作りましょう。

・園の行事に参加して、役割を担っています。
行事に際して、何かの担当や係等を他の保護者と協力してやることで、親しさも増し、関係が深まることが期待できます。また、普段は関わりが少なくなりがちな父親も、役割を持って楽しく関わることができます。
子供と共通の話題ができて、親子のコミュニケーションにも役立ちます。

メ　モ

第４章

豊かな心を育てるために
～心が育つメカニズムと、絵本の読み聞かせ～

　親は、子供に豊かな心をもって欲しいと願い、日々子育ての営みに努力しています。そして子供は、親や友達、地域の大人等に出会いつながりを持ち、自然に触れ合い、いろいろな体験を重ねることで心を育んでいきます。

　しかし、近年は親と子だけの関係の中で子育てをしている傾向が強まり、子供の多様な体験の減少や、親の子育ての負担感の増加が指摘されています。どうしたら子供が健やかに育つのだろうかと不安や悩みを抱えている親が約４割もいるという文部科学省の調査結果は、悩んでいる親の多さを示しています。

　「しずかなひととき　乳幼児に絵本の読み聞かせを」という１冊の資料があります。都立多摩図書館が編集し東京都教育委員会が発行した、東京都子ども読書活動推進資料の一つです。この資料の冒頭には、次のように書かれています。

「絵本は子育てを楽にしてくれます。

子育てには、楽しい時もあれば、つらいときもあります。子供が元気に遊び、機嫌よく暮らしているようなしあわせなときがある一方では、ぐずったり、わがままを言ったり、体調を崩したりするときもあります。
そんなとき、子供を抱き寄せて、お気に入りの絵本を読んで聞かせてください。その時間はたったの５分か 10 分ですが、子供が受ける喜び、満足感は、読み終わった後も一日中ずっと続きます。
座って絵本を読むだけで子供を楽しませることができるのですから、子育てにちょっと疲れた大人にとってもうれしいことです。」

　本指導用スライド教材はⅠからⅥ（本資料）までの６冊のシリーズです。脳科学や医学、運動発達や心理発達、栄養等、多様な切り口での子供の成長発達に関する科学的な根拠を示してきました。これらは全て、子供の健やかな成長を願う親を支えるための学びの素材です。

　このシリーズの最後では、全てに共通する大切なこと－親子のふれあいを通して親も子も笑顔で育っていくための一つのヒントとして、脳科学の研究と読み聞かせの実践をもとに、乳幼児期からの絵本の読み聞かせのよさを伝えます。

23 絵本の読み聞かせは「心」に届いている？

スライド 23

このスライドで伝えたいこと

●これまで経験上語られてきた「読み聞かせが子供の豊かな心を育む」ことについて、また具体的に何に働きかけているかについて、脳科学の実験により科学的な検証が行われたことを説明します。

○ スライドの説明

子供が両親に絵本を読んでもらって喜んでいる場面です。この時、脳の中の「情動」を司る部分が働いています。お父さん・お母さんが読んでくれる物語に、子供の「心」の中では「わくわく」「どきどき」等、喜怒哀楽のいろいろな感情・情動が沸き起こっています。

○ 解説

●「絵本の読み聞かせ」は子供のどんな力を育てるのでしょうか？絵や文字を見て、言葉を聞き、ストーリーを追いかけますから、読み聞かせによって聞く力が育つ、文字を覚える、言葉が増える、想像力が育つ等、知的な力が伸びるのではないかと考える方は多いでしょう。また、経験から、読み聞かせは情緒を育むので良い等とも言われますが、具体的には子供の何が育っているのでしょう？

●絵本の読み聞かせは子供の成長にどのような働きがあるのかを科学的に調べた実験があります。

大学で脳の働きを専門に研究している泰羅雅登（たいらまさと）先生をはじめとする研究グループは、新しい脳機能の計測方法（※1）を用いて、読み聞かせをしている最中の親子の脳の活動を調べました。

その結果、絵本を読んでもらっている時の子供の脳は、記憶や学習を司る大脳新皮質の「前頭前野（ぜんとうぜんや）」ではなく、情動（じょうどう）に関わる「大脳辺縁系」（だいのうへんえんけい）という領域が活発に活動していることがわかりました。

情動とは、五感で受け取った情報に対して、「良いこと・快いこと（＋）」「嫌なこと・悪いこと・不快なこと（－）」を本能で判断する脳の働きで、ヒトにおいては、「楽しい、嬉しい（＋）」や「恐怖、悲しい（－）」等の心の動きです（※2）。実験を行った泰羅先生は、この部分を「心の脳」と呼んでいます。

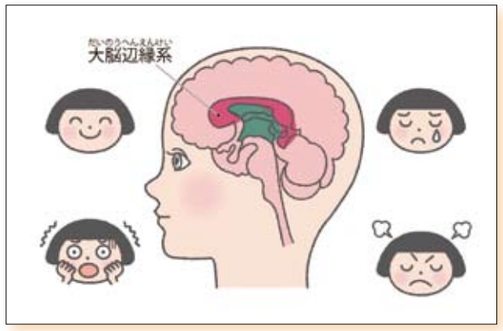
絵本を読んでもらっている時、この領域が活発に活動していたということは、子供は、言葉の意味は分からなくても「心の脳」で感じ取り、喜んだり、笑ったり、びっくりしたり、怯えたりしているということです。この結果から、「読み聞かせ」の効果を科学的に検証すると、「心の脳」に届いていると言うことができるのです。

（※1）脳のどの部分で血流が増えたかを計測することで活動した部位を調べる方法等。「機能的 MRI」「機能的 NIRS」等があります。

（※2）情動と、情動を司る「大脳辺縁系（心の脳）」については、スライド 24 で説明します。また、関連するスライドとして、本教材Ⅰ「脳と心の発達メカニズム」のスライド９「間脳・大脳辺縁系の働き」も参考にしてください。

24 脳科学の先生が考える「心」って？

スライド 24



このスライドで伝えたいこと

●スライド 23 に関連して、脳科学の観点から、「心」を説明します。

○ 解説

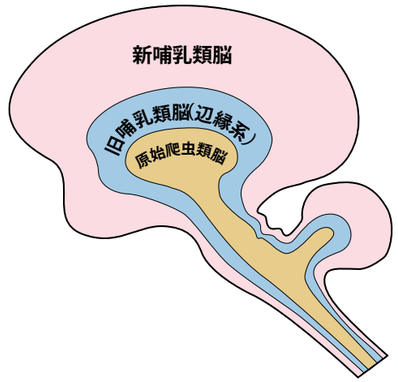
●脳の構造の概要

脳は、右図のように、その役割によって大きく３つの階層に分けることができるという説明があります（※1）。

・脳幹部は、呼吸、心拍、体温調節、食欲等、生命維持のために最低限必要な機能があり、ワニやトカゲ、ねずみ等、どんな動物でも持っている部分です。

・大脳辺縁系は、情動や本能のコントロール等に強く関係する領域です。

・大脳新皮質は、高度に進化した動物が持っている部分で、ヒト以外の動物ではあまり発達していません。ヒトの運動、言語、認知、記憶等を司り、思考や判断など高度な精神活動を行う「前頭葉」はこの部分にあります。



●大脳辺縁系と、その働きである「情動」

・情動は、最初に育つ「快（＋）」や「不快（－）」の原始的な感情です。

・情動の働きがある大脳辺縁系は、五感のすべての感覚が分野に分かれずに情報として入ってくる脳の領域です。その情報を解釈せず、強いて言えば「いい（＋）」のか「悪い（－）」のかという、動物にとってコアな（原始的で本能的とも言えます）情報を受け取り、衝動的に行動を起こします。例えば動物が敵を察知すると生命を脅かされるので「恐怖（－）」を感じて逃げたり、衝動が起こって攻撃したりします。またおいしいエサがあれば同じ場所に何度でも行きます。

●本能的な感情である情動が、行動に密接に関係しています。

このことを、ヒトの「心の脳」の働きとして考えてみます。

・「快（＋）」にあたる「うれしい、できた！楽しい！（いい思い出）」は、「またやろう！もう一度やりたい！」という行動につながります。この経験を与えることは、やる気を持たせることになります。

・「不快（－）」にあたる「怖い、悲しい、嫌だ（嫌な思い出）」は、行動をやめる、やらなくなる、理屈抜きにやってはいけないことだと分かります。

・情動は生きていくために必要な行動を決めている、行動の根っこになっていると言えるのです。

●先の実験を行った脳科学研究者の泰羅先生は、大脳辺縁系（「心の脳」）で、「好き、嬉しい、楽しい、いい思い」や「嫌だ、怖い、悲しい」をたくさん経験することで、喜怒哀楽がしっかり分かり、その上でいわゆる理性を司る前頭葉につながりができ、行動の「アクセル」（積極性・やる気）や「ブレーキ」（制御）ができるようになると言います。

（※1）ポール・マクレーン「三位一体脳説」。ただし、本教材Ⅰ「脳と心の発達メカニズム」では、一部「古い脳」と「新しい脳」という２つに分けて説明している部分もあります。

25 読み聞かせが「心」を育てている

スライド 25

このスライドで伝えたいこと

●スライド 24 の脳科学の観点から説明する「心」を踏まえて、読み聞かせと「心」の発達について科学的に説明します。

解説

●脳の大まかな構造と、脳科学の先生が考える「心の脳（大脳辺縁系）」について分かったところで、「心（の脳）」の育ちについて考えてみましょう。

●実験によると、絵本の読み聞かせをしてもらっている時に子供の脳で活動していたのは、脳科学の先生が「心の脳」と呼ぶ「大脳辺縁系」、感情や情動に関わる領域でした（スライド 23）。子供は感情や情動の領域で何かを感じ取り、笑ったり、びっくりしたり、怖がったりしています。「絵本の読み聞かせ」という刺激は子供の「心の脳」へ働きかけ、子供は、喜怒哀楽の様々な体験をしています。

　この心の脳の働き（本能的な感情･情動）は、行動と密接に関係しています（スライド 24）。褒められる等で「嬉しい、楽しい、好き」がしっかり分かることは、やる気を持って活動したり、挑戦することにつながります。逆に嫌なことはやりませんから、叱られる等で「怖い、悲しい、嫌だ」がしっかり分かることで、やってはいけないこと、危ないこと等を知ることにつながり、また他人の痛みが分かることにつながっていきます。

●ところで、この「心の脳」はどのようにすれば育つのでしょうか。
　脳は、使うことで育ち、うまく働くようになります。これは、脳の全てに当てはまる基本原則です。
　脳を使うということは、働きかけ（刺激）を受けて、脳の中で神経細胞がつながり信号が伝達され、体を調節したり、体を動かしたり、判断する等機能することです。大人でも脳を使わなければ機能が落ちてしまいますが、使っていれば機能を保つことができます。
　「心の脳」も同じで､感情･情動への働きかけにより「心の脳」が刺激を受けることで､情動がしっかり育ち､「怖い､悲しい」や「嬉しい、楽しい」がしっかり分かる子供になります。更にこの両方がしっかり分かると行動のコントロールができる、理性とのバランスがとれた脳になります。
　嬉しいことが嬉しいと分からないと褒められても嬉しいと思えず、やる気は起きません。また嫌なことが嫌と分からないと、例えば叱られても嫌な思いがしないので、良くない行動を繰り返したりするでしょう。（大人になると嫌でもやらなくてはならないことはたくさんありますが、その時は前頭葉で「理性」が「嫌」を押さえ込み行動をコントロールするので、嫌でもその行動をしているのです。）

●また、感情を伴う体験は記憶に残ることがわかっています。子供の能力を伸ばし何かをやらせようとするなら、子供が「嬉しかった、楽しかった」と感じるように褒めたり励ましたりすることが良いのです。また、やってはいけないということが分かるためには子供が「嫌だ」と感じて行動にブレーキがかかることが大切です。この「楽しい、嬉しい」「嫌だ、悲しい、怖い」がしっかり分かるように「心の脳」をしっかり育てることが大切で、絵本の読み聞かせは、そのためによい方法の一つです。

【参考】

脳が育つ仕組みについては､教材Ⅰ「脳と心の発達メカニズム」第３章「脳が育つとはどういうことでしょう？」をご覧ください。

26 ドキドキ・ワクワクを探そう　～自然に触れて、五感の刺激をたくさん～

スライド 26

このスライドで伝えたいこと

●脳が育つ仕組みを説明し、神経系の発達が著しい乳幼児期には様々な刺激を五感で受けることが大切であることや、日常生活で親に意識して欲しいことを伝えます。

解説

●（スライド 25 の解説より）
　脳は、使うことで育ち、うまく働くようになります。これは、脳の全てに当てはまる基本原則です。脳を使うということは、働きかけ（刺激）を受けて、脳の中で神経細胞がつながり信号が伝達され、体を調節したり、体を動かしたり、判断する等機能することです。大人でも脳を使わなければ機能が落ちてしまいますが、使っていれば機能を保つことができます。

●脳への働きかけ（刺激）が脳を育てます
　ヒトは目、耳、鼻、舌、皮膚の５つの感覚器官から刺激を取り込んでいます。「暑い」「寒い」「明るい」「暗い」等の刺激は、電気信号の情報となって、脳の神経細胞のネットワークを作りながら伝わっていきます。このつながり（シナプス）は、刺激を受けることで作られます。たくさんの刺激を受けるとたくさんのつながりを作ることができます。つながり（シナプス）が少なくても、生命維持や動くこと、話すことはできますが、つながりが多ければ、より複雑で高度な思考や判断、多様な動き、経験を記憶として蓄積して未知のことに対応すること等ができます。刺激をたくさん受けて、つながりをたくさん作ることが脳を育てることと言えます。そして、同じ刺激が繰り返されることでつながりは強く、太くなります。

●子供への刺激とは、難しいことではなく、日々の生活そのものが刺激になっています。
　目では光の刺激（昼間は明るく、夜は暗い）、耳では音の刺激（大人が話しかける声など）、口では舌を通して食べ物の味、鼻では食べ物や植物の匂い等、肌では四季の気候、冬の冷たい風、お風呂のお湯の熱さ等いろいろな場面で刺激を受けています。

●また、自然の中では、たくさんの心の体験をすることができます。生活の中の身近な自然を意識してみてください。季節の花、雨や風、昆虫、雲や夕日等、子供は小さなことでも喜び、興味を持ち、いろいろな発見をするでしょう。ドキドキ、ワクワク、はてな？（不思議）、面白い、ビックリした！等、感情を伴う体験は記憶に残ることがわかっています。こうした心の経験からも子供は多くのことを学んでいます。

●赤ちゃんや小さな子供の脳はまだよく出来上がっていないので、強すぎる人工的な刺激よりも、やわらかい自然の刺激を与えましょう。

27 赤ちゃんにも届いているよ、わかっているよ

スライド 27

このスライドで伝えたいこと

●言葉の意味が分からない赤ちゃんでも親の言葉を聞き分けていることを説明し、読み聞かせはとても良い刺激になっていることや、小さな子供でも楽しめることを伝えます。

○ 解説

●赤ちゃんでも言葉が分かるのでしょうか。
　新生児（生後５日以内）の脳の研究では、雑音や、録音した母親の声を逆回しで再生して聞かせた時よりも、母親が話す母国語に、より強く反応を示したという実験結果があります。母親が話す母国語を聞き分けているのです。

●親の語りかけは、とてもよい刺激になって脳を活性化させています。テレビやパソコンの画像ではなく、親の言葉で語りかけましょう。

●赤ちゃんは周りの大人の声や笑顔で育っていくと言われています。
　絵本の読み聞かせは、赤ちゃんとの言葉や心のやりとりの一つの方法です。堅苦しく考えず、大人も絵本を通して一緒に遊ぶ気持ちで、読み聞かせを楽しみましょう。

●「歌いかけ」でも、読み聞かせと同様に大脳辺縁系が活動しているという実験結果もあります。読み聞かせと同じように、「心の脳」に働きかける効果があると言えます。

●小さな子供たちへの読み聞かせ「おはなし会」を続けている都立多摩図書館からは、まだ歩けないくらいの小さな子は耳がよく、歩き出した子供よりもむしろ、わらべ歌などをじっと聴いているという報告や、何度も繰り返すうちにわらべ歌や絵本をだんだん楽しめるようになるという報告もあります。

○ イラストの説明

５か月くらいの赤ちゃんを膝に乗せて絵本を読んでいる母親です。赤ちゃんは、手足をバタバタさせて喜んでいます。ニコニコ顔の赤ちゃんの頭の中、脳の中では、今、感情・情動を司る領域が活動し、「嬉しい、楽しい」感情がたくさん育っています。

28 読み手の脳も活性化しています！

スライド 28

このスライドで伝えたいこと

●読み聞かせと豊かな感情についての科学的な説明の続きで、読み聞かせている時の保護者の脳の働きについても説明します。

○ 解説

●前出の泰羅先生の研究では、読み手である保護者の脳についても実験しました。その結果、読み聞かせている時の保護者の脳は、前頭葉が活性化していました。
　これは、子供がびっくりしたり、面白くて笑ってしまうように読み方を工夫する、努力するという高度な精神活動を行っているからだと考えられます。
　大人でも、脳は使うことで機能を保つことができますから、大人にとってもよい効果があるのです。

●また、絵本の読み聞かせでは、「こう読んだらびっくりするかな？…あ、驚いてる！」「うちの子はここが好きみたいだなあ」等、子供の様子をよく見るようになります。絵本の読み聞かせは親子のコミュニケーションにもよい効果があります（親子のコミュニケーションについては、スライド 29）。

○ イラストの説明

●父親が、子供に絵本を読み聞かせている場面です。「とぉーっても大きい」と、わざと大げさに読んでいます。子供は驚いて「うわーっ」と声を上げています。この時、子供を楽しませようと工夫している父親の前頭葉が働いているのです。

メ モ

29 読み聞かせは親子のコミュニケーションにも◎！

スライド 29

このスライドで伝えたいこと

●読み聞かせが、親子のコミュニケーションにもよい効果があることを説明します。

○ 解説

●読み聞かせでは、子供を観察するチャンスが増えることが期待できます。
　親が感情を込めて読み聞かせをしていると、子供はびっくりしたり楽しそうだったり、怖がったり、意外な部分に興味を持ったり、いろいろな反応をします。するとその子供の様子が楽しくて、親は、もっと反応するように工夫して読んでみようと思います。そして、反応を引き出すために、子供のことをよく見ます。よく見ていると、うまいタイミングを見つけることができるのです。

●読み聞かせで子供を観察するようになると、他にも次のようなことが期待できます。
・普段の生活でも我が子をよく見る習慣がつく。
・子供の少しの変化に気がつく。「この子、こんな事ができるようになった！」
・我が子をすごいと思える喜びを感じる。
こうしたことは、子供の成長を喜び子育てを楽しむことにつながるでしょう。

●また、子供をよく見ることができるようになると、子供の小さな成長や少しの変化に気がつくようになります。すると、子供のことをいいタイミングで褒めてあげることができます。子供は褒められて嬉しかったので、次もやろうと挑戦します。また、「私のことを見てくれた」という安心感を持つこともできます。褒め上手な親になると、家庭での教育も、穏やかな気持ちでできるようになるかもしれません。

●このように、親子のコミュニケーションが良好になり、家庭での教育もうまくいくという循環が期待できます。

●ただし、「読み聞かせ」をあまり堅苦しく考えないで、親も一緒に楽しむ気持ちでやるように進めましょう。

○ イラストの説明

読み聞かせの、こんな場面、あんな場面です。
・赤ちゃんにも母親の声が分かって、手足をバタバタさせて喜んでいます。
・両親に絵本を読んでもらって、大喜びの子供です。
・子供に読み聞かせる時に、子供の様子をよく見るようになります。
・食べ物に関する絵本を読んでいると子供が「いちごー」と言っています。食べ物に関する話題が広がります。
・「この絵本を読んだら寝ようね」。生活リズム作りにもよいです。
・父親が、子供を楽しませるように読み方を工夫したら、子供が目を丸くして驚いています。子供の様子をよく見て、子供の変化に気付くようになります。

30 読み聞かせは子供と一緒に楽しむ気持ちで

スライド 30

このスライドで伝えたいこと

●読み聞かせの良さ、楽しさとともに、堅苦しく考えず親も楽しむことを伝えます。

○ 解説

●「読み聞かせ」は子供の心の成長･発達に良いということを説明してきましたが､「いつ」「どんな本を」「どのくらい」読めばいいのか？等とあまり堅苦しく考えないなくてもよいのです。

●まずは、お母さん・お父さんが楽しみましょう。
・「読まなくちゃ」という義務になってしまうと、親にとって楽しくなくなり、続きません。
・「子供のため」だけでなく、お父さん、お母さんも楽しむことがよいのです。

●都立多摩図書館では、１年を通して小さい子供への読み聞かせ「おはなし会」を開催しています。
そこでは、次のような様子が見られます。
・歩けるようになった子供は動くものに反応してしまいますが、歩き回りながらも全身で聞いている様子が見られます。動き回っていても必ず聞くようになります。
・一方で、小さい頃からじっと座って集中してお話を聞く子供もいます。
・子供によって、好みや行動にも個性が出てきます。わらべ歌や絵本に集中する子供もいれば、友達に関心を持つ子もいます。友達が気になる子供が保護者の膝から離れる様子も見られ、それも子供の成長になっています。

●読み聞かせには、子供に合わせて様々なスタイルがあってよいのです。
・小さい頃は、「読書の初め」と堅く考えず、遊びや触れ合いと考えてよいでしょう。
・初めのうちは子供に合わせて、好きなページやお気に入りのページだけ、というように読むとよいでしょう。
・絵本は、子供の遊びや世界を広げてくれます。無理に解釈をして何かを伝えようとするのではなく、一緒に楽しんで読んでください。

●「絵本を読むのが苦手」という保護者へのアドバイス
・上手、下手は関係ありません。子供は保護者に読んでもらうことが嬉しいのです。
・子供が絵本でご機嫌になると、親も楽になります。
・他にも、P39 の「絵本の読み聞かせ Q&A　都立多摩図書館発行「しずかなひととき」から」を参照してください。

31 読み聞かせのヒント　～こんなこと、していませんか？～

スライド 31

このスライドで伝えたいこと

●親も子も楽しく「絵本の読み聞かせ」をするために、気をつけたいポイントをアドバイスします。

○ 解説

●「絵本の読み聞かせは心の脳に届いていますよ」「親の脳も活性化しますよ」「親子のコミュニケーションにとってもいいですよ」と進めてみても、うまくいかなくては保護者も嫌になってしまうでしょう。
ちょっとした工夫や注意をすることで、子供との楽しい時間を過ごせるかもしれません。

　ここでは、長年、図書館等で絵本の読み聞かせを行ってきた司書の方からのアドバイスを紹介します。
スライドのイラストを示しながら、コツを伝えましょう。

○ イラストの説明

① 一生懸命絵本を読んでいる父親の後ろではテレビがついていて、音が出ています。

子供はテレビが気になって、立ち上がって、テレビの方を向いてしまいました。
このままだと、読み手の保護者は「うちの子は絵本が嫌いなのかな」「集中できない子供だな」と思ってしまいそうです。

●読み手の背後に動くものがあると、集中できません。
・テレビ等がついていたり、動くものがあると、子供は気になってしまうものです。テレビは消して、壁を背にして絵本を読んでみましょう。
・幼稚園や保育園等施設の場合は、読み聞かせている保育者の背後で給食の準備等で人が動いたり食べ物が見える場合、やはり子供は気になってしまい絵本に集中できません。座る位置等の工夫が必要です。

②絵本を読み終わったところで、母親が子供に何か聞いています。

「さて、何人いたでしょう？」･･･ 絵本の内容について子供に聞いていました。子供は、ちょっと困った顔で、母親を見ています。
子供の心は楽しかった絵本のことよりも「正しく答えられなかったらもう読んでもらえないのかな、お母さんは悲しくなるのかな」という心配でいっぱいになってしまうかもしれません。

●絵本の読み聞かせで、「テスト（試験）」をしないこと
・子供は、論理的な思考や判断でなく、まず絵本の絵や読み手の声等、見たもの･聞いたものそのものを受け取っています。それが、楽しい、嬉しい、怖い、悲しい等の感情・情動を司る「心の脳」に届いています。
・記憶力や、数・言葉の知識の習得を確認するような絵本の内容についての質問はやめましょう。

東京都子供読書活動推進資料 2004

しずかなひととき　～乳幼児に絵本の読み聞かせを～ Q&A より

Q どんな絵本を選べばよいのですか？

A　新しい絵本にも優れたものがたくさんありますが、まず 20 年、30 年と読み継がれてきた絵本を読んであげてください。
　長年読み継がれてきた絵本は、今も昔もかわらず子供に喜びを与えます。また大人も深い満足を得ることができます。子供の文化として、これまで伝えられてきた絵本を次の世代にぜひ手渡したいものです。

Q 読み方が下手でも大丈夫ですか？

A　上手に読むことよりも、大人が子供と一緒に楽しむことが大切です。目の前の用事を少し忘れて、絵本に心を寄せて、ゆっくり読んであげてください。
　演じて読む必要はありません。おはなしが面白いのですから、そのまま自然に読めば子供は想像をふくらませることができます。あまり劇的に読むと、かえって絵本の世界を楽しむ妨げになることもあります。

Q 赤ちゃんに絵本は必要ですか？

A　赤ちゃんは、生まれつき、人の声や顔に関心を持ちます。だから赤ちゃんに話しかけたり、歌いかけたり、笑顔を向けると、手足をばたばたさせて、とても喜びます。そうやって周りの大人たちと言葉や笑顔を交わしながら、赤ちゃんは人として育っていきます。
　言葉や心をやりとりする一つの方法として、絵本を使ってみることも良いでしょう。絵本を見せて、ゆっくり話しかけてください。絵本を通して赤ちゃんと仲良くする、遊ぶという気持ちでやってみてください。赤ちゃんが関心を持てば続けるし、本を放ってしまうようなら、また次の機会にします。

Q どこで絵本を手に入れたらよいですか？

A　近くの図書館に行くことをお勧めします。図書館には、長年読み継がれてきた絵本がたくさんあります。その中から、自由に選んでください。また子供の読書について、知りたいことを職員に相談することもできます。
　そして、繰り返し楽しむような絵本が見つかったら、買い揃えることも良いでしょう。書店の本棚に欲しい本がない時には、注文すれば取り寄せてくれます。最近では、インターネットで出版社や書店に注文すると、宅配してくれるサービスもあります。
　子供の好きな絵本を少しずつ揃え、子供の本のコーナーを作ってあげると、とても喜びます。

東京都子供読書活動推進資料 2004

しずかなひととき ～乳幼児に絵本の読み聞かせを～

この小冊子は、東京都子ども読書活動推進計画事業の一環として、都立多摩図書館が編集し、東京都教育委員会が発行したものです。
この小冊子から、小さな子供への絵本の読み聞かせに関するメッセージやヒントを紹介します。

☆絵本は読んだ後も子供の心の中で育ちます☆

子供に絵本を読み聞かせることは、心に種をまくようなものです。心の中に沈んでいった絵本は、いつか子供の生活にひょっこり芽を出します。絵本の中の言い回しを突然上手に使って、周囲を驚かせることもあります。日常生活に、絵本と同じ場面を見つけたり、おはなしを演じて、ごっこ遊びを楽しむこともあります。もっと大きくなってから、何かのきっかけで絵本を思い出すこともあるでしょう。
絵本は、読んだらそれで終わりではなく、子供の心の中でまた新しい芽を出し、成長し続けるのです。それが将来その家庭の共通の思い出とも、歴史ともなるかもしれません。

☆身近な大人に読んでもらうのが、何よりも嬉しいのです☆

字が読めなくても、子供は、大人に読んでもらって、絵本を楽しむことができます。字が読めるようになっても、読んでもらうのが好きです。大人の読むおはなしを聞きながら絵本を見ると、自分で読むよりもずっと楽しむことができるからです。それだけではありません。身近にいる大好きな大人が、自分のために読んでくれることが、何よりも嬉しいのです。

☆たくさん読むより、大好きな１冊を持てることが大切です☆

大人は、どうしても新しい絵本をどんどん読んだり、もっと難しい絵本を聞かせようとする傾向があります。大人が次から次へと、課題のように本を手渡していくと、子供にとって重荷になることがあります。たくさんの種類の絵本を読むことよりも、１冊でも大好きな本を持ち、繰り返し読むことのほうが、ずっと大切です。
大人は、１回読めば何もかもわかったように思いますが、子供は読むたびに、初めての時と同じように、わくわくし、新しい発見をします。大好きな絵本から、深い喜びや励ましを受け取っているのです。「また同じ本」といわずに、何度でも読んであげてください。

☆楽しむことが何より大切です☆

絵本は楽しみのために読むものです。絵本を読み聞かせていると、どんなに子供が楽しんでいるかが、伝わってきます。全身全霊でおはなしに聞き入り、我を忘れて夢中になり、終わるとほっと満足そうなため息をつきます。
字を覚えるためとか、何かを学ぶために読むのではありません。読み終わった後に、いきなり質問などせずに、「あーおもしろかった」という満足感を、子供と分かち合ってください。

☆子供の気持ちを受け入れて、絵本を楽しみます☆

大人は、本を最初から最後まで読むことが、読書だと思っています。でも赤ちゃんや幼い子供の場合は、いろいろなスタイルがあると考えてください。初めのうちは、気に入ったページしか見なかったり、聞いている途中でどこかへ行ってしまったり、ページをめくりたがったりします。最後まで読み聞かせなくてはいけないと窮屈に考えず、子供の気持ちを受け入れて、付き合ってください。
毎日同じことの繰り返しだなあと思っていても、そのうちに、子供は絵本には楽しいおはなしが入っていることに気がつきます。
そして、しずかに大人の声に耳を傾けるときが来ます。

☆静かな時を過ごすことは、とても貴重です。

現代は、テレビ、ビデオやテレビゲーム等、人工的な声や映像に触れる機会が大変多くなっています。このような刺激的な情報メディアが、幼い子供の成長に及ぼす影響については十分分かっていませんが、相対的に、静かに絵本を読んだり、親子で言葉を交わしあう機会が少なくなっていると言えます。
赤ちゃんは、大人が聞かせる語りかけや歌で、言葉を身に付けていきます。そして、わずか２、３年の間に、複雑なコミュニケーションがとれるようになります。このような驚異的な発達は、大人が赤ちゃんと顔と顔を合わせ、言葉と言葉をやりとりしてこそ可能なことです。
ときにはテレビを消して、静かなときを過ごしてください。そのひとときに、たっぷり絵本を読んであげてください。

《支援者・指導者におすすめのウェブサイト》
東京都立図書館　こどもページ
http://www.library.metro.tokyo.jp/child-page/tabid/2502/Default.aspx

いろいろなジャンルの絵本を紹介する「ほん・本・ごほん」、夏休みの自由研究のヒントを探す「これならできる！自由研究　111 枚のアイデアカード」、東京都子供読書活動推進資料、都立多摩図書館の様々なイベントの案内等、楽しくて役に立つコンテンツがたくさんあります。

参考資料・参考文献

《論文等　※ウェブサイトを含む》

○内田伸子「子育てに『もう遅い』はありません」（成美堂出版　平成 20(2008) 年）
○内田伸子「愛着　～対人関係や学習の機能的準備系～」（「乳幼児期を大切に　子供の発達の科学的知見と親の学習支援」東京都教育委員会　平成 21 年）
○鈴木みゆき監修「パパ　ママ　おでかけしよう！2　どんぐりとあそぼう！」（ポプラ社　平成 16(2004) 年）
○鈴木みゆき監修「パパ　ママ　おでかけしよう！3　きたかぜにまけないぞ！」（ポプラ社　平成 16(2004) 年）
○泰羅雅登「読み聞かせは心の脳に届く」（くもん出版　平成 21（2009）年）
○泰羅雅登「子どもの健康　子どもの生活　（連載第２回）読み聞かせは『心の脳』に届く」「同（連載第３回）子どもの『心の脳』を育て、親子の絆を深める読み聞かせ」（「歯科衛生士」Vol.35,No.8/2011、No.9/2011　クインテッセンス出版　平成 23(2011) 年）
○ジョーン・E・デュラント「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」（明石書店　平成 21(2009) 年）
○ Save the Children Japan（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン）ホームページ http://www.savechildren.or.jp/index.html
○子ども家庭リソースセンター編「Nobody’s Perfect　からだ / 安全 / こころ / 行動 / 親（5 冊）」（ドメス出版　平成 14(2002) 年）
○ジャニス・ウッド・キャタノ著「普及版　完璧な親なんていない！」（ひとなる書房　平成 14(2002) 年）
○ Nobody’s　Perfect　Japan（ノーバディーズ・パーフェクト・ジャパン）ホームページ http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/
○小西行郎監修「子どもの心の発達がわかる本」（講談社　平成 19(2007) 年）
○渡辺弥生他編「原著で学ぶ社会性の発達」（ナカニシヤ出版　平成 20(2008) 年）
○子どもの生活科学研究会編「絵でわかるこどものずかん２　しょくじのきほん」（合同出版　平成 24(2012) 年）
○「プレ　NEO　楽しく遊ぶ学　きせつの図鑑」（小学館　平成 19(2007) 年）
○「プレ　NEO　楽しく遊ぶ学　せいかつきせつの図鑑」（小学館　平成 22(2010) 年）

《調査報告等》

○「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」（文部科学省　平成 20 年）
○「平成 16 年度・17 年度　家庭教育に関する国際比較調査」（国立女性教育会館）
○「第 4 回幼児の生活アンケート調査」（ベネッセ教育研究開発センター次世代育成研究所　平成 22 年）
○「東京の教育に関する都民意識調査」（東京都教育庁　平成 15 年）

《行政資料等　※ウェブサイトを含む》

○東京都子ども読書活動推進資料 2004「しずかなひととき　乳幼児に絵本の読み聞かせを」東京都立多摩図書館編（東京都教育委員会　平成 17 年）
○「幼児期から児童期への教育」（国立教育政策研究所教育課程研究センター　平成 17 年）
○「つながりが創る豊かな家庭教育　～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」（文部科学省　家庭教育支援の推進に関する検討委員会　平成 24 年）
○「子どもたちの未来をはぐくむ家庭教育　－家庭教育支援の取組について－」（文部科学省）
○「ドキドキ子育て　家庭教育手帳　乳幼児編」（文部科学省）
○文部科学省家庭教育応援ウェブサイト「子どもたちの未来をはぐくむ家庭教育」ホームページ http://katei.mext.go.jp/
○保育所保育指針解説書（厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課　平成 20 年）
○茅ヶ崎市公式ホームページ「そだれん」

メ　モ

乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト

指導用スライド教材Ⅵ
豊かな心と社会性の成長・発達のために ～子供の自立・自律を目指して～
－スライド教材 CD と指導の手引－

平成 25 年 3 月　発行　東京都教育委員会

【作成・監修】 乳幼児期からの子供の教育支援「教材Ⅵ作成委員会」
委員（五十音順）
黒田　みどり（社会福祉法人芳美会　花の木保育園　看護師）
鈴木　みゆき（和洋女子大学人文学群心理・社会学類人間発達学専修　教授）
町山　太　郎（学校法人町山学園　まどか幼稚園　副園長）
臨時委員（五十音順）
杉山　きく子（東京都立多摩図書館児童青少年資料係長　司書 ）
泰羅　雅　登（東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科認知神経生物学分野　教授 ）
※委員等の所属等は平成 25 年 3 月現在

【イラスト作成】 森　佳世（まちとこ出版社）
【スライド等作成】 株式会社　商華堂
【編 集 ・ 発 行】 東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課
〒 163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話　03（5320）6859　ファクシミリ　03（5388）1734

東京都「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」ウェブサイト
http://www.nyuyoji-kyoiku-tokyo.jp/

携帯電話用サイト
http://www.nyuyoji-tokyoi.jp/